

いづこにありと知るものもなし、  
さても愚ならぬ心を翻へして、叶はぬ果の世を墨染の衣にかへしか、あてもなく彷徨うて知らぬ他國の空に木の根を肥せしか、花の朝、月の夕、さすが情の露に昔を今の涙とする人はあれど、すぎし名物お梅を餘所ながらに傳へるものは、いと浮世の果の怖ろしさに行方も知れぬ物語とぞなしぬ、

仍 如 件

其 一

千年の名跡、塵外の靈場、稱揚讚佛の聲は松華の朝の嵐に伴ひ、歌唄頌徳の響きは荷葉の秋の霜に連れて、修因感果の雲に包まれつゝ、不斷淨戒の表に聳ち、見上ぐれば四岳八峰の蓮華に似たる山また山の頂、一山の草木も悉く觀法の定座となり碩學の權者も悉く示現の赤子となり、凡俗草鞋の脚をもて登ること僅に三里の路なれど、圓滿具足の心もて達すること遙に億萬里の境といへば、誰も知るべき我國の南海に大師入定の地として紀州の高野山、岨々たる山下の周圍七里四方、坦々たる山上の平地一里四方、嵯峨朝の弘仁七年この山を開いて法燈を掲げしより治く朝野の俗界を照し來りて、天正年間の頃は寺領十二萬一千石を有し、織田家の武威に其十萬石を削られしが、徳川氏の歸依また三千石を附して二萬四千石に

養はれたる一山の僧侶三萬人、これを學侶と行人と聖の三派に分ち、金剛峰寺の下に寶門派の寶牛院と壽門派の無量壽院ありて、おのゝ所屬の寺門に合すれば三千坊舎、大門より奥の院に至るまでの在家商人は西院町と小田原町を合して千二百軒、山岳は南海の雲を凌いで聳えながら空に一陣の風なく、樹木は満山の天を摩して蔽ひながら地に一點の塵なく、無垢の清水こゝに玉を砕いて縦横に流れ、清淨の僧俗こゝに心を澄して日夜に往來し、瑜珈の大智を發得せる靈跡の上に魚鳥の肉なく、萬籟の寂寞を感應せる總院の下に色慾の念なく、隨喜渴仰の紫雲は西にありと雖も、即身成佛の靈跡は正しく南の高野山にありて、人間そのまゝに現じ出す一場の佛陀界、時は寶永年間、元祿の後、正徳の前、江戸は諫鼓音深くして徳川家の五代を傳へし綱吉將軍の頃、世は荆鞭蒲朽ちて太平の風流に華奢の小唄を歌ひし歌吹海の頃、もし物の語り草をいへば數年前に赤穂の四十七士が吉良家の夢を破つて討入りし騒動と、日

本一の富士山に俄の瘤を吹き出して寶永山の現はれしとのみ、  
 まして俗界を離れたる千古不滅の靈跡、十二萬石の寺領を有して坊舎三千僧侶三萬の古昔に及ばずと雖も、高野山上の戒壇に眞言一宗の法燈ますく輝いて、加行灌頂の修行いよく、長に嚴なるのみか、固より肉色一切禁制の外、さらに人間糞尿の汚穢まで厠に置くを禁じて、いづれの寺門にも縦横自在に流るゝ山水を幸ひ、これを汚道川と稱へて其の水流に落し込めば、三里奔湍の下に大瀧となつて雲散霧消し、居ながらに現世からなる極樂淨土の玉の臺といふその高野山第一の伽藍を備へたる壇上の中央、そもゝ大師この山を開きし時の案内者を祭りし高野明神の社前、わけて清淨無垢の靈場とせるところに何事ぞ、一日の曉、臭氣紛々、こてくと左巻の太糞を垂れて積み上げたるものあり、  
 加之もその糞の太く遅しき體は古今にあるまじき不思議の言語道斷、いかに鼻を蔽うて首を

捻るも人間の仕業とは思へぬ奇々怪々およそ五六寸ほどの太さを一丈あまりの長さ、千石船の纜を解いて積み上げたたるが如くに渦巻きぬ、

さりとして糞は糞なり臭氣といひ色澤といひ正しく人間の垂れし糞に相違なき以上、やれ怖ろしや此の大糞を無遠慮に垂れし奴、そもくいかなる母の胎内に生れし大の男ぞ、満山の僧俗を驅り集めても六尺の上に首のあるものなし、さては外より入り來つて高祖千年の靈跡を一朝の糞白癡にせむとする末世巨大の曲者ありと、俄に總院の鐘を撞き鳴して空前絶後の糞騷動となりぬ、

其二

千古不滅の靈跡を保てる清淨無垢の高野山中、加之も開山の因縁いと淺からぬ壇上を汚して明神の社前に積み上げたる例の臭氣紛々、その不思議の大糞を取圍んで一山の僧侶こゝに

を掴みながら、小田の蛙の啼くが如き評議まぢく、

「や、なるほど、これは言語道斷、いかにも奇怪千萬ながら、さてく見れば見るほど古今獨歩の業、ふしぎに美事な汚れで御坐るわい」

「しかし、人間の糞は人間腹中の汚物を譬の穴より排除いたす外、いかなる巧妙の細工人も手先の器用で作り出す筈も御坐らねば、いよく人間の糞と致したところで、これほどの太く逞しい大糞をする奴が御坐らうか」

「さればさ、そもく釋尊は丈餘の御身にあらせられたと聞き及ぶが、末法末世の人間界に斯ほどの立派なる巨糞を物の美事に放出すべき奴、あるべき筈の道理が御坐るまい」

「ないと云はれても現在この體ぢや、正しく人糞で御坐るぞ」

「いかにも怪鳥の糞でなし、奇獸の糞でなし、疑念もない人糞々々、第一この臭氣が身に取

ツて各、争はれぬ覺えの證據で御坐らう」

「もし滿腹の五臟六腑が腐つて糞になるべき病人の口中より、堪らず一時に吐いたものでは御坐るまいかな」

「萬一、左様な奇病あつて口より吐いたとすれば、苦しまぎれに散亂いたす筈、それが宜しく剛柔の中を得て、繩の如く左巻に堆く積み上げた工合、よほど腹加減の善い奴と見えまするな」

「いよく人糞とすれば、その腎相應の人間あるや否や、猶更以て判斷に苦しみまするぞ」折しも本山の金剛峰寺より長者の老僧一人こゝに歩み來りて、隙間なき衆徒の衣の袖を掻き分けながら、雪の如き眉を擧めつゝ、暫時その大糞を打守りしが、果は老の兩眼より涙はらくと流しぬ、

「いづれも無言、つらく事の體を考へ見れば、令法久住の靈跡には古今あるまじき此の大汚物、突如こゝに斯く現在の實形を現はして堪き難き臭を一山に發する所以、正しく高祖太師が心行懈怠の我々を戒め給ふ方便と覺えまするぞ、聞きも及ばるゝ筈、古昔この野山に名を得られし華藏院の覺海僧正は、法燈守護の大念願を起して忽ち身を大天狗と變じ、あれ見られよ、かゝる山また山の頂上に猶かつ雙峰の高山と數へらるゝ其一を覺海山の名を呼ぶは紛れもない、あの雲近く人跡を絶ちて鬱蒼たる寂寞無聲の中に今も棲はるゝ僧正が、大師の感果をうけて眼前の諭戒を示されし業に違ひなし、いづれも有難く近寄つて無量大智の現實を拜跪せられよ、南無大師遍照」さては天狗の糞、覺海僧正でも元は人間、羽翼が生えて飛んでも流石に糞だけは變らぬ臭氣ありと、四面繞圍の衆徒おもはず感動しながら、現在この大糞を這ひ寄つて紙め盡すほどの

隨喜渴仰に至らねば、やうく鼻頭の抓み手を取外せしのみ、たゞ目と目を見合して打守る中より、白袈裟をかけたる十六ばかり新發意一人ぬつと中央に飛び出すや否、からくと大口あいて高く笑ひぬ、

「大師の示現でもない天狗の仕業でもない、この大糞を垂れたのは此の小僧ぢや、三日の糞を放溜めて太い竹筒より押し出した工夫、はッは ヽヽヽヽ」

其三

千古無垢の清淨戒壇を自己が廁と心得、臭氣紛々たる三日の放溜を太き竹筒より押し出して、人間にあるまじき天狗の糞騷動に一山を嘲弄せし言語道斷の曲者、みれば明王院の新發意に宥観として今年十六の白袈裟小僧なり、

そもく高野山の制として門主法印を除くの外、一山いれも悉く黑白二様の木綿袈裟に分ち

て、登山の修業いまだ十年に満たざるものは眉雪の老僧と雖も白袈裟をかけ、既に登山の修業十年を越せしものは若輩の青坊主と雖も黒袈裟をかけ、一目こゝに年齢の長幼よりも修業の深淺をもて其の新舊を分てる中に、わけて今道心の新發意その白袈裟をかけたる十六の生々しき小僧が、大木の一葉にだも如かざる法端道末の身を以て、現世現在この玉の臺を三日工夫の大糞に汚したる振舞、外道の化身なり惡魔の所爲なり羅刹波旬の變化なり、うかくすればあの糞を隨喜渴仰の涙もろとも我等に舐めさせむとせし奴、宜しく柔和忍辱の法衣を脱ぎ慈悲愛染の法心を去り、倒さまに引ッ捕へて大師廟前の坑に埋め殺すべしとの評議、満山を動かしぬ、

されどまた曠志執著の念に反する一派ありて、たとひ鬼畜の惡業にせよ、この靈跡に鐵山家合の地獄を現せむこと却て高祖の本意にあらず、まして斯る曲者の他より入らずして同宿法

窓の中より出でしは、世間の俗界に野山の末法衰微を示すに似たれば、宜しく法衣を剥ぎ袈裟を奪ひ丸裸のまゝ山を追ひ下すべしとの議論を生じぬ、

時に以上の二派を破りし一派の議ありていふ、石子詰の刑は古昔より當山の沙汰と聞ゆれども未だ會て行ひし事なく、また現在これほどの曲物を身體そのまゝ無事に山を下すは一山の戒め薄きに似たり、されば幸ひ壇上を汚せし罪と明神への清めに山下より名を得たる在家の大力を呼び上せ、最勝會の相撲に彼奴を引摺り出して、抛け殺さるゝか不具になるか萬が一にも助かるか、宜しく時の運に任して明神の活殺自在を伺ふべしとの議論、竟に一山を制しぬ、この最勝會の相撲は年々五月、この野山第一の法樂として壇上の中央に土俵を築き、開山案内の神意を報謝せむがため、一山の僧侶こゝに出て山下在家の百姓と東西に分れ、おのゝ必死の勇を奮ひつゝ勝敗を争ふこと二日興行の例あれば、かの宥観小僧を呼び出して大

力の敵に番はしめ、たとひ生命を免れても首骨を挫くか腰骨を折るか、今年やうく十六の新發意、もはや満足の五體を保つまじとて總院の評議こゝに一決し、まづそれまでは明王院の師の坊に禁錮せられぬ、

かくと漏れ聞きし宥観小僧、おもはず満面の微笑を含んで青黛を塗れるが如き坊主頭を振立てながら、面白し、末世末法の狼狽眼に人間の糞と天狗の糞と取違へて騒ぐほどの奴等が、たとひ一山を盡して我に向ふとも何の恐るゝところかある、まして最勝會の相撲に在家の凡夫力を以て我を抛け殺さむとは跛者の踵に金剛盤を踏み潰さむとする類、面白し、と紅の舌を吐き出して其日を待ち受けぬ、

時しも五月十二日、最勝會の相撲興行には三日以前、

其四

仍如件

さらぬも俗界を隔てし靈場の夜更け人定まりし後、一山の草木また寂寞として睡れる眞夜中  
ごろ、明王院の經藏に二日以前より拘禁せられたる宥観小僧、この曉には最勝會の相撲に引  
出されて蹴殺さるゝか、幸ひ生命無事に取残しても不具となるべき筈の身を持ちながら、生  
れついたる不敵の根性、そのまゝ大の字となつて駟聲雷の如し、

『宥観、宥観』

いづこともなく聞ゆる聲に、おもはず目を見開けば、ほつと射す燈火の光りに師の坊の宥光、  
我枕頭に立ちぬ、

『や、師の坊』

聲もろとも一轉、むくりと起き直れば、明王院の住職宥光房、ことし六十三の老の身を屈め  
眉を擧めて指り寄りぬ、

『宥観、死活いよく、半夜の曉に迫つたぞよ』

『半夜は偕置いて、刹那瞬間の眼前も、肉身の生滅に執著は御坐りませぬ』

『それは無常の感想、枯木の作るゝ如く自然の命數を知つてこそぢや、まだ法末の芽生に等  
しい十六の今日、自己みづから死を待つ白癡に半夜と刹那の差別があるかッ』

『は』

『去れ、去れ、遁けて出い、夜の明けぬうち山を下つて他國いづれの空なりとも思ふところ  
へ落ち行け、師弟の因縁、一山を汚した罪は祖師の廟前に宥光が身を責めて助けるぞ』

『は』

『もし現實、法力呪縛の罪に當らば遁ぐるとも遁けられぬ筈、幸ひ恙なく山を下らば宥光が  
身を以て高祖大師の無量慈悲海に浴し得たと知れよ、總院の衆徒いかに曠志の執著ありと

も、もはや遁け出せし後、この老僧を壇上の相撲に引出すまいぞ、去れ、去れ」  
「はッ、法恩、師恩、身を徹して有難く存じますれど、俗界の在家いづれの土地にも所縁なき宥観、何物の種に生れましたやら、きけば二歳の曉、籠の學文路宿へ捨てられしを師の坊に拾ひあけられ、今日までの御養育に蒼海一粟の報謝も致し得ず、十六の今、かゝる不淨の罪を残して此まッ」

「いかにも拾ひあけし時の守札に東國武士某一子といへるの七字の外、さらに一葉の草の葉もない身ながら、ゆけば自然また行かるゝ道あつて憩ふべき樹蔭もあるぞよ、親に等しき此宥観と思へば猶更ら以てのこと、去れ、去れ、身を全うして去れ、元來の資性、幼少の頃より一山に誇つて育てしが、かく今こゝに愛別離苦となるも因あつての果ぢや」  
宥観小僧、おもはず頭を垂れて兩手を膝に重ね、肩を凋め身を縮めて木像の如くなりしが、全

身たゞ一滴の涙もろとも靜に面を上げぬ、

「師の坊、皆これ因あつての果ぢや、と仰せらるゝ其、その御一言に依つて宥観もはや、何事も、たゞ生あるかぎり、この野山に念は残さずとも、偏に師の坊の在す方を故郷の空と心得まよして」

「法界と俗界を隔てゝも心念が通へば自然の縁ぢや、去れ去れ、はや夜の明けるに近いぞ」

「は、はッ」

其五

五月十四日、いよく壇上の高野明神に法樂供養のため、一年一度の興行、最勝會の相撲を催しぬ、

今日こそは千古の靈跡、糞騷動を起したる外道の振舞、あの明王院の宥観小僧を引摺り出し

仍 如 件



て在家の大敵に對はしめ、捻ぢ殺さるゝか抛け殺さるゝか、但しは萬に一つの運命を取残して不具になるか、惡業の應果を見むとて山上山下より雲霞の如く押寄せぬ、山上の衆徒方には學侶派と聖派と行人派の三派より一粒擇に選抜いて、傳へ聞く古昔の叡山法師を眼前に見るが如き荒坊主三百人、山下の在家方に大門街道の粉川と名倉と妙寺の村々より力足を踏んで上り來る血氣の荒男三百人、手に不斷の經卷を捨てたる入道頭と、手に平生の鋤鎌を抛ちし百姓頭と、おのゝ東西に別れて二日の間は一山を震動するばかりの勢ひ、まして今年は砂煙の外に血煙も立ちかねまじき勝負ありといへば、夜の明けぬうちより人浪を打ちて押寄せし僧俗の見物、片唾を呑んで寸隙もなく壇上の土俵を取巻きぬ、此日、かの宥觀小僧を敵手として在家方より選ばれしは、名倉村の水呑百姓ながら年々の相撲に最手の大關を取外せし事なき大力の早業、身材は六尺に近く體量は二十五貫を越え、加

之も父母なく兄弟なく妻子なく物の分別さへ聊か足らぬ勝の獨身者、おのれが身の現在呵責の獄卒に使はるゝとは思はず、たゞ滿身の力に及ぶかぎりの活殺自在、抛け殺しても仔細なしと許さるゝや否、首骨を据ゑ肩骨を怒らせ四股を踏み鳴して喜びぬ、名は勘治平、年は三十二、折しも今日の番組を受持の役僧、こゝに顔色を失うて驅け込みながら、明王院の宥觀小僧いづれにかまゝて影なし、さア遁けたくゝと狼狼眼の大聲を振立て、叫び廻りぬ、さては明王院の住職宥光の業、かくまで重き一山汚辱の罪を思はず、おめゝ師弟肉身の輕き愛に換へて、わざと取遁せしに極ツたり、この上は免れぬ縁の同罪ながら、流石に古き一寺の老僧、たゞそのまゝ袈裟を奪ひ法衣を剝いで山を追ひ下すべし、さなくば今日の明神の法樂供養の甲斐なしと騒ぎ出しぬ、こまゝこの明王院に來りて一夜の宿を假りしは、古昔、野山全體の行學に反して邪道異説

の大敵と罵られながら、八祖傳來瀉瓶一味の本宗より別に新義眞言の正宗を起せし覺鑿上人の創立、その根來寺の法水に流を汲める頼覺房とて今年四十八の大坊主、かくと聞くや否、勃然として夜叉の如くに起き上りぬ、

「宥観小僧の糞始末も宥覺房の後始末も斯くいふ根來の頼覺が引受けたぞ、長十丈の鬼たりとも我法力を以て組めば何のその、さるを凡下凡俗の匹夫野郎、相撲の敵手とは事も呵しや、片手掴みに掴み殺してくれろぞッ」

其六

一山に臭氣を放ちし糞騷動の本人、その宥観小僧が俄に山を遁け伸びて、免れぬ縁に残りし明王院の住職宥覺を寺門より追ひ拂はむとすれば、折しも一人こゝに宿りし他山の坊主ありて、みづから師弟の罪を荷ひつゝ進み出でて最勝會の明神相撲を引受けむとぞ叫ぶ、加

か之も其の大坊主を根來の頼覺と聞きし野山の總院、おもはず法衣の袖を巻き上げながら拳を握り眼を怒らし大地を踏み鳴して猛り立ちぬ、

そもく大師入定の數百年後、堀河朝の嘉保二年、肥前の一寒村に生れたる小兒八歳の時、その父が村長の前に蟲の如く拜伏せしを怪み、これを問へば村長は父よりも尊く郡主は村長よりも尊く國司は郡主よりも更に尊く、また國司の上に遠く一天萬乗の天子あれども得て望むべからず、たゞ人間を遙に去りし無上の最尊最貴なるものに神明佛陀ありと聞くや否、この小兒こゝに猛然として自己その神明佛陀たらむ事を誓ひ、十歳の孤影に家を飛び出し、諸國の艱難流浪に諸山の明師を叩き、十八歳にして高野山に入りしが、天生の志望、修得の行學、ともに異彩を放ちて一山を空しうせしのみか、高祖廟前に求聞持の法を成就して大智大識の曉、始めて野山の末世末法は祖師の行徳に反するを歎き、喝破一聲、これを改革せむとせ

しが忽ち頑冥固陋の衆徒に嫉まれて一山の攻撃に逢ひ、果は闇夜の白刃に刺されむとせしこと幾度、寢る時は穴居して甲冑を纏ひ續經の時は蟠居して長刀を携へしも衆寡こゝに敵せず、わづかに流血淋漓の身を遁れて都に馳せ上るや、百獸を顧みる獅子の奮勵一番、別に新義真言の一派を天下に叫んで朝野を動かし、竟に勅許を賜はり院宣を得て大小の傳法院を創設し、果は同じ紀州の國中に根來の一山を開いて後奈良の朝に興教大師の謚を得しもの、これを覺鑊上人といふ、

以來こゝに源泉一滴の法流を汲みながら、野山の衆徒は根來の新義派を見ること蛇蝎の如く傳へ來りて、殆ど高祖破却の佛敵邪道とせる其の根來の賴覺房が、おもはず飛出して一山汚辱の罪を犯せし師弟の盾となるのみか、最勝會の法樂相撲を一呑に呑んで傍若無人の大言、名倉村の勘治平とは何物の凡下ぞ、長十丈の鬼なりとも我法力の金剛に摺み殺さむと叫びし

かば、一山は忽ち鼎の湧くが如し、

十六の小僧が三日放溜の大糞を竹筒より押し出して千年の靈場を汚せし事も、一寺の住職たる六十二の老僧が泡沫に等しき現世師弟の愛を以て永劫不滅の罪を遁せし事も、今は詮議の違さへなく、只この根來の賴覺房が頭上に一山の悲憤を注いで、もし相撲の手に餘らば惡魔降伏の劍を揮つて膾にせよとの猛勢、あのまゝ生けて再び當山を下すべからずとの評定一決、いよく二日興行の今日を見通して翌日の日中を相圖に其最後を見届けむとぞ取極めぬ、加之も當山の正傳を破りし覺鑊の末流、根來の佛敵と知りし上は、高野山上いづれの寺門にも今夜の宿を貸すべからず、また遁け出すべき新道舊道の出口に番を据ゑ置き、終夜の雨露に打たせて其まゝ立往生さすべしと觸れ廻れば、賴覺房からくと大口あいて高く笑ひぬ、  
「一山の總院、この賴覺に一夜の宿を貸さぬとて固より樹下石上を旨とせる塵外の身に何の

癡言、されど根來より來ッて眠るべき坐もなく高野の雨露に立往生せしとあッては末代こ  
 こに面白からず、幸ひ我祖道の興教大師が嫉妬偏執の白刃に圍まれ給ひし時、傍なる不動尊  
 の石像に傷つきしまゝ、刃影の端に御身に及ばず、今なほ記念に残る覺鑊が血止の不動阪、  
 これぞ我ための七堂伽藍、その尊像の下に一夜を通夜しまるらするぞ」  
 唸るが如く教ふる如く説くが如くに語りながら、女人堂に近き不動阪の邊、世に聞えし高野  
 山上の一名所、覺鑊が血止の石像へ悠々と歩み行きぬ、

其七

高祖大師が入定の奥の院、小田原町を過ぎて一の橋と二の橋を越え、世に御廟橋といふ三の  
 橋の前、その傍に依然たる覺鑊堂はあれど、一山こゝに憤怒の腕を組んで廟前に近づくを許  
 さねば、悠々と踵を返して女人堂に下りつゝ、いはゆる覺鑊が血止の石像を拜跪しながら、  
 この曉には總院の衆徒に自己また生命を規はるゝ根來の賴覺房、その不動阪の不動堂に入り  
 て常住三昧の一夜を過しぬ。聞として耳に鳴り響く萬籟無聲、寂として身に沁み渡る夜氣陰  
 々、一點の燈影なき山腹の草堂に端坐しながら、靜に扉を押開きつゝ、闇夜の明星を誘ひ入れ  
 て透し仰げば、只これ有るが如く無きが如く、闇中ほッとして形は臙の眼に映せざれど、平  
 生の心念に描ける不動不驚の大威怒明王、あり／＼と我を見下し給ひぬ、  
 頭に戴く八葉の蓮華、面に現はす青黒の憤怒、熾盛炎々たる迦樓羅の焰を負ひつゝ、右に悪  
 魔降伏の智劍を捧げ、左に大悲大徳の繩索を持し、金剛盤石に坐して無邊に現出せる法身、  
 生けるが如し、

賴覺房、その前に兩眼を閉ぢて一念不亂の祈誓を込めぬ、

「金剛智能斷、金剛定能溥、所求一切事、隨時得成就、こゝに賴覺が肉身の滅却を恐るゝに

あらず、また當山の衆徒を碎破せむとするにあらず、たゞ斯の如き末法虚義の徒輩を幸ひ、今この時に當つて現實に度し去らむとするの念願、あはれ暫時この頼覺に斷壞一切衆徒の法力を降し給へ、如上殊勝功德、金剛手菩薩」

一念こゝに注いで祈れば、忽ち頭上より不動明王の聲あり、

「この馬鹿野郎ッ」

頼覺、むくりと頭を振上げて間にも輝く兩眼、くわツと見開くや否、鐵の板をも蹴破るべき猛威に進み寄りぬ、

「道心堅固の頼覺に狐狸の業あるべき善なし、念願の通力に依つて我に利益ありとも木像に言葉あるべき善なし、何物ぞ、いざ出い」

聲に應じて間中の一物、ごそくと不動明王の背後より這ひ出でし體、頼覺さらに驚かず、答

をあげて透し窺へば、その拳の下に答へて曰ふ、

「師の恩に反いて、未だ山を降らぬ明王院の宥観小僧」

其八

不動阪の不動堂に通夜念願の頭上より、大喝一聲、この馬鹿野郎と叫んで這ひ出したる間中の一物を何奴と思へば、はや既に山を落ち伸びし善の宥観小僧と聞くや否、高野一山を敵として驚かぬ根來の頼覺房も流石に案外の心地しながら、星明を引き入れし堂の扉を閉ぢつゝ、

聲を潜めぬ、

「何として山を降らざりしぞ」

「一山の衆徒この宥観を取遁せし後、いかに師の坊への振舞あるか、それ確と見届けむがため」

「や、人しれず遁すも留まるも師弟の間さる事ながら、現在その師弟の盾となりし此、この頼覺を感想同宿の友と思はず、たゞ卑しき俗界の一言を喝して馬鹿野郎とは」

「おのれが罪を老いたる師に残して其まゝ山を落ち伸びし小僧と見られし事、いかにも無念、これに報いし一言、どれほどの心耳に觸れましたやら」

「や、それもよし、解したぞ、さらば師の坊の成行、もし一山の瞋癡に纏はれて身の定座を失へば何とする」

「もはや師の情に反くとも師の禍を見るに忍びず、幸ひ二日の最勝會まだ一日を餘せば、このまゝ土依に飛び出して、首骨、胴骨、腰骨、手足、宥觀の五體いづれなりとも敵手の望むところを挫かせて師恩の犠牲に供へまする」

「師を全うし身を碎いて後、出家方便を去り在家正道に就く心か」

「いや、肉身の一端に生命さへあらば、たとひ不具になるとも金翅鳥が諸の毒悪を啜ふが如く、眼前に火生三昧を起して、この一山は火となりまする」

この小僧、そもく何物の化身ぞ、糞を以て千年の靈場を汚せしのみか、火を以て一山の坊舎を焼き拂はむとの言葉に、頼覺、おもはず鼻に似たる目を闇に光らしながら、あな怖ろしやと容を更めぬ、

「法は廣大無邊、山は永劫不滅、坊舎また佛陀の給仕供養を存するところ、これを焼いて何の智力となるべき、まして其うちに免れ難き恩師の老體あるを忘れたか、やれ危し、危し、たまくこゝに頼覺が來つて自然の盾となるは正しく高祖大師の示現、宥觀を助けて相撲の敵手を抛けよとの事ぞ、その敵手にさへ勝たば師の坊に恙なく其身に念なく、一山の衆徒も瞋恚の執著を宿すべき影なし、たゞ其まゝに満虛空中の如く現はれて出でよ、いかな

敵とも組んで勝負を決せよ、一念を金剛に注いで掴み拵けよ、この頼覺が縛魔の法力を添へて後見するぞ、爾時金剛手三昧起告、南無や不動不驚、はや空は東天に近いぞ、衆徒に驅り出されむより、如是こゝに打連れて壇上以待たう」

獅子の如き頼覺、猛虎の如き宥観、大小の坊主頭を曉の明星に照らしながら、まだ脚下す闇き草堂より衣の袖を連ねて、のそりと立出でぬ、

其九

他山も他山に依りけり、そもく當山の腹より生れ出でて法敵となりし覺鏝の末流、その根來に名を得た頼覺と聞きし上は、もはや明王院の師弟詮議に及ばず、たゞその蛇蝎を踏み殺せとて、一山の衆徒は狂氣の體に騒ぎ立てぬ、

されば高野明神へ法樂供養の最勝會も、きのふ一日の相撲は兒戯に等しく、けふ一日の勝負

は戦場に等し、

三日以前より呼び上されて坊舎に宿れる在家の大力無雙、かの名倉村の勘治平は五體の筋骨を揉み出して生仁王の如く、わけて今朝は満山の衆徒に取囃されながら、鐵鉢の如き大茶碗に酒を注いで飲むこと三升、朝ほらけの空に六尺の渾身より紛々たる酒氣を仰ぎ吹きつゝ、盤石も踏み抜く猛勢、大地に轟く力足を踏み占めぬ、

「お山の影に育つた御寺領内の身ぢや、年々の最勝會に片屋入の大關は取ツて占めても俵、持ツた力の十分一、なるべく相手の衆に怪我のないやう、そつと宙に受けて柔かう組んだが、御坊達、今日こそは會釋も用捨も手加減もない總身の力業、この勘治平が生れて三十

二の曉、始めてこの面白い相撲を見せまするぞ、わけて十六の新發意と思ひの外、どこから來たか、やれ氣の毒なこと不意に飛人の大入道、首叩きと外掛の得手を出すまでもない、

仍 如 件

鼻と鼻との眞正面に向へば最後、敵手の皮も骨も肉も煎餅菓子ぢや、もし飛違へて手先が觸れば其まゝ搔擽んで、はゝゝゝ手鞠ぢや、引付けて組めば浮殻ぢや、はゝゝゝゝ」  
 嗜く喚く猛る嘲る、満腹便々の酒氣を虹の如く吐いて、小山の動き出すに似たる體、衆徒いづれも雀躍の手を拍ちながら、人垣に取巻いて坊舎の門を押し出しぬ、  
 曉けなば現在この大敵に擱まるべき露の生命を、やうく不動阪の一夜に宿せし頼覺、そもく今朝いかなる顔色やある、取組の時刻に早けれど、まづ引摺り出して荒膽を挫けと、氣早の衆徒七八人、一散の脛を揃へながら壇上を横ぎらむとすれば、明神の附近なる杉の樹蔭より、大喝一聲、

「頼覺、こゝにあるぞッ」

はッと驚いて見返れば、頼覺のみか、既に山を落ち伸びし筈の宥観小僧もろとも大杉の根方に腰うちかけて満面の微笑を含みながら、小手を連ねて差招きぬ、

「この曉方より骨が鳴り肉が動いて待ち受けた、やれ待ち草臥れた、鬼か人か何物にせよ敵手の用意さへあらば、何時なりとも時を嫌はぬぞ」

宥観小僧また矜迦羅童子の如く、加之も高く大口あいて笑ひぬ、

「糞で一山を動かした宥観、今日の相撲は屁で放り飛ばすぞ、はッはッはッ」

其十

飛んで火に入る根来の頼覺たゞ一人と思ひの外、どこの葉蔭に今まで潜みしやら、はや既に山を落ち伸びし筈の宥観小僧まで顯はれて、明神の大杉より小手を揃へつゝ呼止めしと聞くや否、一山の坊主頭いよく血に湧き立ちぬ、

二日の最勝會、残る今日一日を過しては袋の鼠を取通すに似たり、さらば一切の相撲を止め



て直ちに彼奴等二人、明神の供物に捧げむと、そのまゝ人浪を打つて壇上の土俵に押寄せつゝ、引出されし頼覺房と宥観小僧、互に父子の如く打連れながら悠々と西の埒に入り來りて差控へし面魂、いかなる降魔の金剛杵を頼みけむ、一山の敵を呑んで満面の微笑、東の埒には名倉村の勘治平、雲霞の如き衆徒の勢ひに嚇し立てられて、生涯こゝに一度の晴業、六尺の身を動き出しながら、肩を怒らし肱を張り胸板を突出しつゝ、じろりと前面を見渡せば、あはれ引汐に取残されたる濱邊の藻屑に等しく、たれ一人の味方も介添も拾ひ手もなく、ひっそりとせし中央に古入道と新發意とたゞ二人、

「やれ一人で濟む筈を二人まで、殺生、殺生、たゞ苦痛のないやうに占めてくれるがせめての功德ぢや、やつと立向ふを相圖に五體の飛散る方角へ目を付けて、いづれも念佛々々」からくくと高く笑うて衣類を脱ぎ捨て、黒土の荒細工に捻り上げたる如き身を運び、行司の聲

も待たず力水を一口、のそくと土俵に上りて四方を見廻しながら、仁王立の勢ひ大地に根を持つが如し、

かくと見て取りし頼覺坊、衣の袖を背後に跳ね退けて下衣の白衣を卷上げつゝ、四十八年の行學を積んで修め來りし眼中に一種の光輝を放ち、念力満々の額越に遙に虚空を睨みながら、ぬつと立ちぬ、

「執持猛利劍、一斷無餘習、執持金羅索、一溥無能動、凡俗匹夫の力は枯れたる秋の木葉に等し、何物の障礙かある、頼覺こゝに如影隨形護」

それ起てと叫べば、宥観小僧、丸裸となつて蝗の如く土俵の上に飛び出しぬ、かくと聞き及びし明王院の住職、師の坊の宥光は老の兩眼に涙を浮べながら、一室に閉ぢ籠りて死せるが如き念佛三昧、

仍 如 件

それに引換へて眼前かくと見る一山の衆徒は東の埒に溢れて四岳八峰も踏み破る勢ひ、狂氣の如く叫びながら、平生の讀經に馴れたる鬨の聲、

西の埒には頼覺たゞ一人、もの凄く輝ける眼中に瞬きもせず打守りて、彼もし土俵の砂に埋もれたらむ時は、我また野山の骨となつて再び根來に還らじと、満身の太息を含んで、無言寂寞、

土俵の上には麓七里四方に聞えたる、六尺大力の勘治平と、今年やうく十六の新發意たる有観小僧、大小黑白、おの／＼互に狗居となつて視ひぬ、

其十一

東の埒には鬨の聲をあけて一山の衆徒幾千人、西の埒には孤影無言のまゝ、根來の頼覺たゞ一人、土俵の上には生ける仁王の如き名倉の勘治平と矜迦羅童子の化身に等しき有観小僧と、

互に相向うて斃すか斃さるか、活殺生滅の二利那、

勘治平、狗居となりつゝ、右の力腕を下して左を自己が脇腹に控へながら、猛獸の小鳥を視ふが如き體、じろりと額越に見れば有観小僧、兩の拳を打揃へて前に突き出しながら、肩と肩との間に首を縮めつゝ、差俯きし口のうち、南無阿彌陀佛、

さては小僧、逆も免れる生命の瀬戸際と知つて、おもはず漏れし念佛の聲、あはれ笑止や觀念せしかと、頭上より冷かなる微笑を浴せて差覗くが如く面を突出せば、何ぞ圖らむこれぞ敵の最後を弔ふ一片の回向、やつと叫ぶや否、その差覗きし眼中へ兩手の砂を搔上げて、はつと立ちながら反身になりし間一髪を金剛の念力、自己が頭腦を碎くか首骨を折るか、電光石火の勢ひに、敵の陰囊を覗うて突上げしかば、音に聞えし流石の大力無雙も不意を打たれし急所一點の早業に堪らず、暫時は其まゝ、片足に六尺の満身を支へて病める猛牛に等しく唸

りしが、忽ち五體を大地に吸はるゝ如く、控と響いて打倒れぬ、  
 あつと呆れて開きしまゝの目と口ばかり、聲さへ出でぬ一山衆徒の中より血氣の荒坊主七八  
 人、衣の袖を襟首に結んで土俵の上に躍り出せば、頼覺坊、西の埒より飛び込んで宥観小僧  
 を背後に圍ひながら、兩の大手を擴けて鬼神も蹴破るべき憤怒の形相を現はしぬ、加之も一  
 期の大音聲、

「や、御房達、何とせらるゝ、たとひ千年の清淨を汚せし罪ありとも道心いまだ彼岸に達せぬ  
 十六の新發意、たゞ一朝の戲事に生涯の五體を捨て、悔ゆればこそ、既に遁れし身を再び  
 自溥の當山に立戻つて、九死一生を得難き今日の相撲に出でし上は、もはや高祖大師の無  
 量慈悲海に浴し明神法樂の無邊供養に叶うたる筈のもの、されど只これ肉眼の外に心眼な  
 き御房達を説破せむがため、兩々相對して勝敗こゝに定まる現在の今、そもや何の怪しむ

ところあつて暴惡の相を並べらるゝぞ、覺鑊の末流、新義眞言の古入道、根來の頼覺それ  
 承はるまでは御房達、この土俵を降さぬ、もし相撲は興が足らずば幸ひの番組、此まゝ  
 此處に衣を脱いで其七八人、いちく引受けるぞ、まるらうか、まるらるゝか、什麼」  
 満目の敵中に一介の肉身を峙て、俱利迦羅龍王の喝するが如き猛威に、一時の血氣坊主お  
 もはず顔色を失うて土俵を遁け降れば、頼覺なほ立てるまゝ靜に首を捻りつゝ宥観小僧を振  
 返りぬ、

「一山の的に取られし用は濟んだぞ、高祖の廟と明神の社前へ御暇乞して、いざ諸共に山  
 を下らう」

其十二

女人堂より神谷を打過ぎ神根井を降りて、高野山の麓、紀の川の邊、學文路宿の旅籠屋に今

仍 如 件

夜の宿を求めつゝ、かけ離れたる奥の一室に漏るゝ燈火の窓を閉ぢながら、頼覺房と宥観小僧、

「父に等しい師の坊へも後の煩累を残さず、また一山を汚した罪にも行はれず、あの大敵に對うて不思議の勝を得ましたも、如是功德、偏に金剛の法力を添へられた御房の加護と心得まする」

「や、皆これ其の身その我を忘れて自然の大通力を得た一念の業ぢや、さも無くて叶ふ筈のない六尺の大男に、やうく童形を脱した十六の骨身、もし他より添うた法力ありとせば、もはや高祖大師に罪を許されて明王の加護を垂れ給うた現實ぞ、同じ骨身の古ほけた頼覺が何の、何の、はゝゝゝ、儲まつ無事に三里の山を此、この籠まで下ツたが、これからの浮世といふ、雨風の激しい俗界へ下るには始めての旅路、いづれの方角へ向いて行かるゝ氣ぢ

や、こゝと定めた心當りの所縁ばし身に持たるゝかな」

「は、一切無縁、どことも定めず、只その雨と風とに此身を任しまして」

「事の起因は儲置き、兎にも角にも新發意の身を以て千古傳來の一山を敵に取ツたは尋常の器に盛れぬ業、されば初歩の浮世にせよ、そのまゝの雨風に打たれて朽ちも果てまい、なれど川を渡るに舟、山阪を越えて杖草鞋、また世を過すには身の知邊、聊か案内いたさう」  
「法縁か俗縁か、たゞ師の坊へ三日お宿せしばかりが、かくまで深い御恩の袖に包まれまして」

「いや、包むほどの廣い袖も持たぬが、この衣の端に高田左門といふ兄あつて小祿ながら江戸の空で槍一筋の男、これを探ねて武家にならずとも、儲また何かの便利にならうぞ」  
「や、さては御房も、東國の武士種で在せらるゝか」

「いかにも、今いふ通り兄の弟、在俗ならば馬鞍に跨がるべき身を、仔細あつて京の宮家に仕へし縁者の許に貰はれ、その家また仔細あつて退轉の砌、智積院の新發意となり、十五年前、本山の根來に來つて一寺の住職になつた頼覺房、生れし時の名は高田祐之進、はは、不意に呼ばれては耳にも付くまい、我ながら今は他人の名を聞く心地」

「この宥觀また東國武士某一子といふ、たゞ七字を父の記念に二歳の春、この學無路宿へ捨てられましたを、あの明王院の師の坊に拾はれましたる身」

「む、云はゞ自然の俗縁あつて、生れ故郷の空へ歸る身ぢや」

「されど南無、この一夜が佛縁に離れて、曉けなば塵の浮世いかなる身の末を取りますやら、せめて最後の念佛、十六の今日まで法身を保ちました山上に向うて通夜の讀經」

「それ善哉、末法の衆徒に對する一時の方便ながら、頼覺また祖師の靈地に恐あり、通夜の

共念佛、共念佛」

其十三

たとひ山を追はれて去るも、たとひ山を蹴つて去るも、十六の今日まで法身を保たれし祖師の靈跡、籠の露と消え果つべき運命を拾はれし恩師の在すところ、うけし血は東國の種なれど育ちし身は當山の外に浮世を知らぬ宥觀、今や住み馴れし懐かしの空を離れて東の旅路に立つと思へば、天生不敵の心にも何とやら名残り惜しく、終夜山上に向うて讀經念佛の曉、はや東天を告げ渡る鴉の聲に残んの燈火を吹き消して、兩眼に涙、ほろりと落しぬ、その傍に伴うて通夜せし頼覺房、また道心堅固の古入道ながら、この曉の一點の佛縁と俗縁の境目、その間に我身を置いて眼前この宥觀を送り出すかと思へば、ふしぎや肉身に別る心地、靜に衣の袖を搔合せて振返りぬ、

仍 如 件

「もはや曉けたぞ、佛界の最終ぢや、俗界の首途ぢや」

「は、どこまでも盡きぬ御恩の袖ながら、これにて別れまする」

「いや、せめて紀の川の彼方、紀見峠の此方、橋本の宿まで送らうぞ」

「遙の旅路、こゝも橋本も同じ事に無益の御苦勞、此まゝ、たゞ此まゝに、御暇を申し受け  
まする」

「遙の旅なればこそ、一步たりとも送る心ぢや」

「は」

「たゞ遣るが惜しく乃至また其、その器を浮世に捨つるが惜しくば、根來へ伴へ歸つて、し  
みくゝと心の濟むまで、二月三月の足を止めるか、但しは更めて我新義の法界に包み終る  
念願の工夫もあるぞよ」

「は」

「されど、いづれ行くべき空と想うての事、この頼覺に初草鞋を送られて潔く行け、終生  
また逢ふやら逢はぬやら、有無轉變の世の中ぢや」

高野一山の靈場に古今あるまじき糞騷動を起せし悪戯者ながら、いかなる利那の感想に打た  
れしか、今この頼覺坊が一言に腸を絞られつゝ、無言の頭上に禮拜の両手を高く捧げぬ、  
居座を定めて住み馴れし後は心の働きに得べき業もあれど、まづ浮世の旅に無くて叶はぬも  
のは斯物なりと、頼覺その身の持合せし財布の底を叩いて江戸の兄が許へ依頼の書状もろと  
も宥観の肌に着けさせ、學文路の宿を立出でながら、紀の川を渡りて橋本の町外れ、往來の  
歩を呼込む森影の葎簀茶屋に腰うちかけし時、ふと振り返りて何心なく見れば、その茶屋の奥  
より半面そつと現はせしは最勝會の相撲に急所を打たれて氣絶せし名倉の勘治平、

仍 如 件

其十四

高野山の麓は三里の阪を降りて學文路宿、法界の寺領は紀の川の岸邊、その流水を渡りて橋本まで立出づれば、もはや敵地の境を脱せしと思ひの外、心を許せし葎茶屋の物影の名倉の勘治平、ちらと半面を現はすや否、頼覺房、おもはず床凡の腰力を据ゑて宥觀の耳に口、眞如の月影に住むべき身を以て婦女の嫉妬に等しき衆徒執著の業か、但しは度し難き凡俗の匹夫奴、おのれの迷ひの餘忿に驅られて最勝會の仇を報はむとてか、よし現在いづれにせよ前途の道を立塞ぐ障礙物、手を出さば縛魔の金剛ありと、懐中より五智の鐵に鍛へたる守護の五針を取出して右手に握りながら、靜に衣の袖を卷きつゝ見返れば、宥觀また不敵の右手に脚下の尖れる切石、そつと拾ひあげぬ、

「清淨の臺に身を置いて圓滿無垢の心を保つべき佛徒さへ、末世の今は野狐の衣を纏ひし

體ぢや、されば猶更ら以て煩惱の塵深い浮世の旅に用心專一、どこの穴かに何物の狼狽へ出ようも知れぬ、わけて首途が大事、この橋本で別るゝ筈ながら、幸ひ河州の三日市に所用あり、また泉州の堺へも行かで叶はぬ所用を思ひ出した、はゝゝゝゆるゝ送らうぞいざとて宥觀を促しつゝ、もろともに葎茶屋を立出でて橋本の町を打過ぎ、東家村を越えて紀見峠の麓に差かゝりし頃、いづこの間道を走せ廻りしか、背後より影を潜めて追ひ來るべき筈の勘治平、ぬつと路傍の藪疊より飛び出して前に立塞がりぬ、

加之も細き阪路に猶更ら見上ぐるばかりの大男、おのれが血氣の大力を頼んで毛胸を現はしつゝ仁王立に塞ぎながら、はや山蔭の夕陽に近く四邊に人はなし、四十八の古入道と十六の新發意に冷かなる微笑を浮べて向ひし體、腕も脛も藤蔓を纏ひし松の大木を組み合せたるが如し、

仍 如 件

「うまれて三十二の今日まで首に枕を當て、眠る外、起つて土俵の砂に身を横たへた事のない名倉の勘治平、相撲の術に外れた不意の急所なりやこそ大盤石が倒れて生涯一度の不覺を取つたぞ、この面は儲置いて一山への申譯、この小僧は貰ひ受けた」

頼覺房は、と笑うて右手に握れる鐵の五拵を道心の胸壁に構へながら、雫の如く身を捨て、飛び出さむとする宥観を左手に押へつゝ、阪路に溢れて立塞ぎし敵を見る事、ぬしなき破寺の木像に等し、

「こりや匹夫、そこ退け、おのれ元來どれほどの強力を備へても皮一枚に膿血を包んだ人間の肉體、物に當らば紙の如く破るゝぞ、大盤石とは轉ばぬ筈の心念ちや、疑はしくば眼前この古坊主を手捕にして見よ、はゝゝゝゝさア來い」

其十五

夕陽いつしか西の山蔭に傾きつゝ、四邊に人なき紀見峠の登り口、その阪の上より身も心も行く道に溢れて阿修羅の如く立塞がりしは名倉の勘治平、その阪の下より立竝んで向ひしは古入道の頼覺と新發意の宥観小僧、もはや生死の運命に間一髪も寸隙もなし、互の血走る眼に睨み合せて驅け寄りむとする折しも、麓より近く聞えし街道馬の鈴の音ちやらく、

頼覺と宥観、耳に聞けども下より上に向うて見返る違なく、自然の勢ひ上より下に向ひし勘治平の目に入りしは旅の武士一人、馬の背を飛び降りて兩手を上げつゝ走せ上りながら、大喝一聲、

「味方、味方、味方するぞッ」

流石は事に馴れたる武家の用意周到、待てとも叫ばず止まれとも叫ばず、たゞ味方々々と大聲に呼んで、いづれに味方するかと互の心を引きし一刹那、はや既に走せ付いて飛鳥の如く其

仍如件



中間へ飛び入りぬ、

みれば前途の空に遙けき旅装束を整へし二十八九の武士、骨格、面魂、息切もせず顔色も變へず此坂を走せ上ツて、加之も生死を争ふ其中間に悠々と平氣の身を落著けし體、浪人か、もし浪人ならば世の中に強ねたる一癖物、知行を取損ねて彷徨く男振でなし、主持か、もし主持ならば藩中に唄はるゝ毀譽の巷、おめく殿の御前に扇子を開いて酒色の興を添ふべき男振でなし、

『高野參詣の折から最勝會の相撲を見物したものの、事の起因は問はずとも分つたぞ、その大男奴、この御房達を何とする、あの土俵で萬一、おれの無慈悲の暴力に任して新發意の骨身を挫かば、横合より飛び込んで敵手に取らむとした好奇心の見物ぢや、はゝゝそれが今また此處に來合して、同じ根に咲いた喧嘩の花見とは面白いぞ、や、御房お手を下さるゝ』

までもない、その新發意を連れて此まゝ通らツしやい、幸ひ山越の徒然に拙者この生命知らずを申し受けたぞ』

腰に横へし兩刀無用の顔色、右手を廣げしまゝ宙に突き出して勘治平に差向けながら、あまの左手に腰巾著の口紐を解きつゝ中を搜りて、がちやくと鳥目を掴み出すや否、懐中の紙に捻つて頼覺と宥觀が立並べる頭上より、それ駄賃を取らずごと馬士に投げ與へし體、膽魂みちりて、打てば倒るゝ五體の急所どこにあるやら、

頼覺おもはず慙慙の腰うち屈め、宥觀もろとも禮拜に等しき會釋、

『いづれ斯る事のあらうかと存じて、橋本までの管を、せめて泉州路まで無事に送り遣はしたく、それがために古入道、は、これは根來の頼覺房と申しまする、また、これなる新發意は今回、さる仔細あつて、已むなく野山を下りましたもの明王院の宥觀と申しまする』

仍 如 件

「御念に及ばぬぞ、さ、早う、拙者これに介添いたす、其奴もし手を出さば取ッて抛捨てる  
までの事、たゞ路傍の立木と思つて通らッしやい、峠を越せば三日市の宿泊でがな在さう、  
やがて後より訪ひまゐらす」

あはれ高野山麓の七里四方に敵なき大力と聞えたる名倉の勘治平、遁け下りもせられず遁け  
上りもせられず、おもはぬ紀見峠の阪路に立往生となりぬ、

其十六

もし不意に擁護の助力なくば、捨身の心念を以て暴悪の胸壁を貫くべき一刹那、現在その危  
きを他に遺して安きを偷み去るにあらねど、眼中に敵なき武士の猛威、あとに萬一の恐もな  
き體を見届けしかば、そのまゝ峠を走せ越えて三日市の入口に宿を求めながら、宥観その門  
邊に木像の如く立ちつゝ、恩人の影を待ち受けぬ、

はや暮れ果てし宵闇の空に十七日の月、ほつと町外れの麥畑より射し出づる頃、草鞋に道芝  
の露を踏んで腰に兩刀の面影、宥観これぞと走せ出でて迎へば果して恩人、

「小僧、お迎ひに出ました」

「や、これは無用の禮儀、痛み入る、御房いづれの宿」

「は、あの旅宿に先刻より頻りと、お待ち受け申して居りまする」

「それは猶更ら以て痛み入る、なれど身勝手はいへば塵外衆との同宿は長の旅にも得難い  
語り草ちや、おしかけて夜と共に御談話を承らう、時に拙者、ふと一人の道伴が」

「は、お道伴の方、これへ早速御案内、どこに在せられまする」

「は、ムムムそれが案内、異な道伴で、御房達と懇意のよし、や、何として歩が遅いぞ、急  
けく」

仍 如 件

振返りて月影に差招けば、二間ばかりの此方まで急ぎながら、俄に立寄りしまゝ中腰に動かぬ體、宥観、何心なく透し見れば正しく名倉の勘治平、

「不意の道伴この男ちや、今夜の同宿は一段と面白い筈、はゝゝゝ」

宥観、はや心に呑込んで、一轉の言葉、ものゝ音響に應ずるが如し、

「一切斷壞、幸ひ身に怪我もなく去闇就明の御同伴、一入さらに喜んで迎へまする、忍辱の法衣を卷上げた憎い小僧と思召さず、うちとけて、これへ、これへ」

きくや否、武士おもはず感歎の舌鼓、

「佛界の事は得知らぬが、我等の守る身に取つては風上に据ゑ置くべき天生の潔白、けに青竹を割つた如しぢや、まこと自然に出來た男振、十六の新發意には惜いもの、惜いぞ、くこりや六尺の五體を無用の沙汰に振舞した後悔男、これへ出た上あらためて御謝罪せい」

力業に餘りて分別に足らぬ勘治平も、一山衆徒の操り人形に使はれとのみか、嫉妬執著の白刃となりつゝ、峠の阪路へ立塞がりし我身を思へば、今更ら總身に冷汗の心地、照り渡る月に反いて武士の袖影より眞ッ黒の盤大面そろりと現はしぬ、

「名倉の勘治平に其まゝ、よう似た此男め、始めて御意を得まする」

其十七

雨露霜雪、おのゝ異なれど落ちて流るゝ谷川の水、忿怒の峰に上りつめたる人の怨恨も解けて下りし籠の末は野原、敵も味方もなし、

國も境、心も境、月に見上ぐる紀見峠を隔て、一切の執著を打忘れつゝ、三日市の宿に終夜の物語、頼覺と宥観と名倉の勘治平、その三人を友として十年知己の加くに談笑する武士の素性を聞けば、ふしぎや同じ身の居坐を追はれて東の空に向ふ旅、

仍 如 件

「南龍公以來、物頭の家ものがしらに生れし紀州家の藩中はんちゆう、しかも代々同一の名を傳へて大泉周左衛門といへば聊か人にも知らるゝものながら、この身が七歳の時、父は同役の某と口論の末、引くに引かれぬ武門の意氣地に果し合ひ、互に相打の相死となりしが、相手は時めく御部屋方の紅粉こうほんに所縁しよえんあつて知行そのまゝ一子に譲られ、我は千五百石の三分一、それさへ此身の二十五歳になるまで召上げられ、親類後見の日影ひかげに百石の放し飼、されどよし、その二十五歳の曉はと文武に身を碎いた甲斐もなう、やうく約束の歳に召出されたは同じ百石、まして不具も勤まるべき太平の世の御寶藏番、や、下さらずば改めて一粒も下されぬが却て武士の面目、もし賜はらば大國の君より正しく仰せ出された御一言、相手方の幸運も妬まぬ、父が御馬前外の死を遂げた千石分を差引、あと御約束の三分一その五百石は必ず戴くべき筈の身、されど百石この一身を養ふに足ると思へば、知行の多増減に依つて相

傳の君を斜めに見ること廉恥ある男の本意ならずと心得、ことし二十八曉まで三年の間耳と目と口を塞いで啞の如く盲目の如く聾のやうに勤めて来たものぢや、はゝゝゝされど其、その百石すら、なほ過分と私語き無用の捨米といふ奴がある、はゝゝゝ呵しい人心ちや、折柄、君が秘藏の愛犬、いはゆる士の菜色あつて犬の肉は肥えたり、その犬め近來、ふと狂病の牙を鳴して諸士の脛に噛付き、これがため傷ついたものが今日も三人、今日も七人、また今日も十人、中には足輕の小娘その狂犬に一命を取られながら、誰あつて訴へ出るものなく、いづれも恐れて御犬様に媚諂ひ、麻上下の凜々しい武士の袂に賄賂の魚肉鳥肉を忍ばせるといふ體、なるほど此の大泉周左衛門に百石の知行は惜い筈ぢや、一日の夕暮、三の丸の櫛形内くしがたうちを通行の砌せき、ばつと不意に飛來つたのが此犬、身を開いて襟首を搔攪むや否、宙に抛上げて落來る下より拔打の一刀、斬れたぞ、刃は高木貞宗二尺六寸、胴を兩斷にし

て災禍の根を絶つた翌朝、あらう事か、現在この犬の齒痕を向脛に残した腰抜共が首頭取となつてこの大泉周左衛門へ申し渡されの義は、切腹のところ別格の御慈悲に追放ぢや、はッはッ、結句の僥倖、和歌山の城下を立退いて、再び還らぬ故國の名跡靈場、高野山へ參詣の朝が最勝會の相撲、みれば六尺の大男が一山の衆徒に囃し立てられ、その十六の新發意が唯一人の御房に後見され、勝負の後の爭論に始めて事の大異を知つたのみか、また峠の急場に出會うて今かうなつた始末ぢや、はッはッ」

敵を眼前に置きし間一髪の危急にさへ、腰巾著の鳥目を探つて馬士に投げ與へし男、今また涙の種となるべき不運の我素性を語りながら、なほ平然として幾度か天井を仰ぎつゝ大聲に打笑ひぬ。

其十八

糞を垂れて高野山を追ひ出されし明王院の宥観小僧と、犬を斬つて紀州藩を追ひ出されし大泉周左衛門もろともに、前途は同じ東の空、加之も周左衛門は最勝會の相撲を見てより塵外の僧形には惜しき新發意と思ひ、宥観また紀見峠の難を救はれしより天晴の武夫、かゝる人を友にせばやと思ひ込み、いはす語らず互に思ひ合ひし身が今こゝに胸うちあけて兄弟の如く、さらば幸ひ相携へて旅の道伴、ふしぎの縁に浮世の果まで伴ひ行かむとぞ約しぬ、かくと聞けば猶更ら根來の頼覺房も同じ情の露、衣の袖に餘りて我子を託する心地、偏に行末を頼みつゝ見返れば、此方の片隅に名倉の勘治平、悄然と化け損ねたる狸に等しく、目を瞬いて六尺の身體を縮めながら、今は包むに堪へ兼ねて泣くが如く訴ふるが如し、

「最勝會の相撲と紀見峠の白癡さ、それを差引かれましては逆も無事に五體ない善の勘治平、たゞ名と面だけが似た奴と思召して、もはや曲けた心の眞直に立直つた下郎一人、道

仍 如 件

中お荷物を擔ひ、山阪お草鞋の紐を結びながら東への御供、叶ひますまいか、實は名倉へ  
 歸りましても親なし妻子なしの獨身者、わけて牛小屋に等しい他人の片廂で其日々々を水  
 吞百姓の身、たゞ年々の最勝會へ聊かの興を添へるだけに持った男、それが今年の土儀に丸  
 潰れの上、かうなるべき物の道理ながら、また紀見峠も仕損じましては、生涯お山の衆に睨  
 まれ土地の者に笑はれて二度と用のない白癡力量の持腐れ、踏まれたまゝの田の草と共に  
 朽ち果てまする奴、同じ踏まるゝならば聞き及ぶ日本一の大江戸、その中央で、どういふ  
 音のするものか、みごと踏み殺されたいが念願で御坐りまする』  
 身材は六尺の大兵、とる年は三十二の男なれど、野に生れしまゝの天生、踏み迷ひし横道を  
 悔いて心の本道へ立歸れば、たゞ見る小兒の如き可愛さに、大泉周左衛門、おもはず微笑を  
 浮べて首肯きぬ。

『田の草と共に踏まれて朽ち果てるよりは、同じ踏まるゝ身を聞き及ぶ日本一の大江戸に踏  
 まれたいと面白、その一言いかにも面白、念力の早業に急所を突かれて倒れ、また  
 この周左衛門にこそ手鞠の如く取られたが、世間たゞの奴に向うては勝れた剛ぢや、第一、  
 おのれの恥を知って生れ故郷へ歸らず、いはゞ兜を脱いで今まで敵と覘うた我等の草履ま  
 で擱まうとは、學ばずとも自然の善惡に差別の早い男、びらりしやらり、當世風の華奢に  
 流れて、小唄に耽る腰拔武士よりも萬々の上乘、や、快く承知したぞ、引受けたぞ、法界  
 の山を追はれた還俗坊と、相傳の君に追はれた素浪人と、故郷の土に見放された水吞百姓  
 と、以上三人の東下りぢや、ざんざめく花の大江戸で浮世を假の男世帯も一興、はゝゝま  
 いかに思はるゝ根來の御房』  
 頼覺おもはず笑を傾けて、引かるゝにあらねど何とやら羨ましき體、

仍 如 件

「あゝ扱も面白けの行末、若い人々は男一代するだけの事せらるゝが浮世ぢや、はゝゝゝゝ」

其十九

前夜あれほど冴えし月影も、窓うつ夜半の小雨に閉ぢられながら、今朝また思ひの外に晴れ渡る旭日影、いとと青葉の色添ふ紀見峠の翠を染めて、街道の露に夢を残せし草鞋の痕を見れば、はや心せはしく立出でし旅人の姿、高野參詣の友を呼交ふ聲々、小唄に合して荷馬を追來る鈴の音、いづこも同じ假寢の空なり、

折しも三日市の宿より出でし町外れの小松原、六道能化の地藏菩薩が路傍に立たせ給ふ石像の前につきぬ、名残の四人が袖袂、前夜の雨よりも今朝の露よりも何とやら濡り勝なり、ふしぎの縁の柱に立ちて大泉周左衛門は誰が目にも寸隙なく凛々しき旅の武家装束、宥観は青々とせし坊主頭の黒くなるまでは道中そのまゝの新發意、勘治平は一文字笠に布子の拾著

を高く引上げて紺の脚絆に跣足の草鞋、ぬツと六尺の身を帯てながら二人の背後に隨從ふ體、遙けき旅の空を守る譜代の忠僕めいたり、

この三人に對うて枯木の如く立てるは頼覺房、行學道心ともに今年四十八の古入道ながら、今ぞ浮世と塵外との別離、きのふ今日の淺き交際なれど深き契りの情は骨肉に等しき心地、しかも現在こゝに相見る互の顔貌、此ま、變らぬ人の身でなし、さらに末を思へば流るゝ水の泡沫に似たる生滅無常、いよく果敢なし、

「突如の所縁かくなりしは、よくく前世よりの因を引ける果と存すれば、その新發意の事、選俗の後は猶更、わけて兄品の大泉殿へ頼みまゐらす、また勘治平も一朝翻心の新なる善人、行末長く御恩に預かるやう、偏に頼みまゐらす、遠き東の空と南の果、加之も浮世の在家と山間の法界、いづれ音信も自然に疎うなり勝の事、たゞ陰ながら御無事を祈ります

仍 如 件

わざく、また有觀の手を取つて、その顔を今更の目に、しみぐくと打守りながら、さも思ひ入りし體、

『根來の頼覺、もはや五十の阪に二年、また逢ふやら逢はぬやら、今この別離に臨んでの一言、よく身に受けられよ、其身そのまゝの佛徒たらば、一山の法燈を嗣ぐべき大智識となるか一山の教界を破るべき大悪魔となるか、恐るべき道心の轉化物、また其まゝ俗世の巻に交はれば順に従うて仁義者の名を得るか但しは逆に遇つて古今不敵の奸毒者となるか、いづれの道にもせよ音なく聲なく尋常の器で濟まざる天生、猶更ら以て平生の謹慎專一、願はくは鋭き心の角を多年の精魂に磨ぎ丸めて、清く圓かに平かなる境涯を守られよ、ゆめ忘れても以後一切、おのれの活氣に任して物を破らぬやう、只管念じ入る、根來坊中の破

邪劍とて荒法師の如く人に知らるゝ此頼覺すら、行末の恐れを抱いて斯くまでの一言ぞ、宥觀、握られしまゝの手を押し戴いて、兩眼の涙に頬を傳はせ、立ちながら無言の身を打傳しぬ、

いつまで惜むとも、いづれ別るゝ袖の露、さらば、さらば、東の空に向ふ三人、根來に歸る一人、互に歩みつゝ振り返らぬ心のうち猶更ら哀れ深し、

其二十

いろは文字を一人づゝに割り當て、四十七士の用を濟せし後は、天下に有餘る楷行草の本字幾千萬、その數を知らねど、さて現在の忠義ともならず末代の語り草ともならぬ世の中、まして元祿の華奢風流に染め出したる大模様の袖幕は、あはれ先祖が血染の關が原を忘れ果て、今や子孫繁昌の奥深く蒔繪の手函香箱を枕として睡る太平の夢、

仍如件



弓矢は白粉臭き楊弓となり、鐵砲玉は女の手を取りし落人の行方となり、陣鐘太鼓は色里の  
三味の音じめに打消され、刀は武士の知行看板、槍は大名の伊達道具、甲冑は五月人形の粧  
飾物、馬鞍は花見の寛活を競ふ寶永年間、

日本一の富士山に一夜の瘤が吹出るほどの面白い當世ぢや、生きて血の氣のある人間が多年  
酒色の蒼に瘡を吹かいて何とする、とけて流るゝ戀の浮世に野暮と化物は禁物の大江戸、  
冬空に鳴り渡る筑波おろしの北風は肌にも立てど、八百八町の墓を舐めて戸の寸  
隙より音なく吹き入る當時の淫風は、千代田の城といはず大名の屋敷といはず武士といはず  
町人といはず、美醜尊卑男女老少貧富無差別、いつしか人の皮肉に宿りて惡魔の毒酒に酔へ  
るが如く、腐らぬものは石と鐵、豆腐さへ堅く角張って色糸の小唄に合はぬといふ四里四方  
の歌吹海、

また花は櫻に人は武士といへど、當時の花は春の霞に隅田堤と上野飛鳥の空よりも、四季に絶  
えず物いふ花の君傾城が色香を咲き揃ひし吉原の里に不夜城の全盛、その武士も當時の武士  
は然諾を重じて一言の下に生死を決する意氣地は繪草紙に残る古昔の事、たゞ魂魂脱殻の五  
體ごろく、裙を引摺りながら印籠の緒占に妻の簪を外して珊瑚の珠を奪ひ、身を護る刀の目  
貫に男女和合の丸裸を彫出し鐔の物敷奇に戀歌を刻み鞘の化粧に古錢を箆込んで、一切の風  
俗こゝに歌舞伎の俳優めいたる體、面に紅粉を施して男色の切賣せざりしが、せめて先祖と  
子孫への申辭、

そもく、當時かくまで腐り果てたる此江戸へ入り來りて、五色に彩る満目浮華の輕薄に包ま  
れながら、いづこに身を置いて何を爲さむとせしか、千年の靈跡たる高野一山に糞を残して  
飛び出せし宥觀の還俗坊と、將軍の三家たる紀州一藩に男を惜んで飛び出したる大泉周左衛  
門

仍如件

門と、見世物小屋の外に買手なき六尺大兵の勘治平、  
時は寶永六年の夏の七月上旬、田舎は夕顔棚の下涼みながら、江戸は美人の手に送る團扇の  
風ならでは人の羨まぬころ、

其二十一

徳川の同じ流を分けて世に唄はるゝ天下三家の其紀州家に、そもく南龍公以来の物頭を勤  
めし家筋、いかに不運の孤影を踏み潰さるゝとも、いかに久しく百石の端知行へ落し込まるゝ  
とも、父祖傳來千五百石の一粒種、人しれず親類縁者の倉庫に預け置きし財寶を當座の金銀  
に替へて、肌につけ來りし黄金は一身そのまゝ、臍を枕にしながらも十年衣食の用意に餘あり、  
されば悠悠たる青葉の旅路に道中の景色を打眺めつゝ、また始めて降りし江戸の空も知らぬ  
浮世に尾羽うち枯すべき筈なく、宥観を我弟分として養ひ勘治平を我家來として召使ひ、

わざと繁華の巷間に女人禁制の男世帯、

まして紀州家から追出されし上は、たとひ一死を甘するほどの知己を得るとも、三家追放の  
身として他の大名へ仕官奉公のならざる掟、周左衛門また固より今更の主取を厭ひ生涯浪々  
の覺悟、されど徒らに醉生夢死の徒輩となりつゝ、日蔭に世を送らむことは元來の天生に取ッ  
て身を切らるゝよりも辛き男、年は中流に棹さす二十八、心は自然の盤石に似たる大膽、文武  
兩道に身を委ねて腕は冴えたり氣は確なり、氏素性さへ他に劣らぬ此武士道の逸物、そもや  
元祿以來この寶永年間の浮華淫風に染み渡る江戸の中央に住んで、おめく龜の子の如く手  
足を無事に縮め終るべきか、

その奔馬駿足を繋ぐに等しき大泉周左衛門を父母同胞なき我身の力草と頼みつゝ、兄と仰ぎ  
弟と呼ばれて坊主頭に還俗の髪を蓄へし後日の宥観、これまた葉蔭に轉がる芋蟲の如く世

仍如件

の中を送るべきか、

先祖より年久しく傳へし紀藩の周左衛門、その身に江戸勤番の縁者なきにあらねど、一切不通、絶えて夢にも訪はず、宥観も根來の頼覺房に依頼の一書を添へられし高田左門あれど、事なき今は無用の身を差控へて其まゝに打過ぎぬ、

浪宅ながら見苦しからぬ家を淺草の田原町に構へて、かはるゝ二人が隔日に江戸市中の見物、その留守には名倉の勘治平が六尺の大兵を打屈めて廚に働き味噌醬油の通路に彷徨いて往來の目目に立てば、猶更ら町内近所の風聞に上りぬ、全體あれは何物ぢや、

凛々しく面魂の一擲あるべき武家浪人と、やうゝ五分ばかりに生え伸びし十六七の毛坊主と淺草門前の仁王に等しい荒男と、以上三人さらに何の世渡る業もなく、悠々寛々として飛耳長目の江戸繁昌に住む體、いよゝ不審的となりて四邊の耳に口、やア用心堅固、薄氣味

の悪い奴が舞ひ込んだぞ、正體の分るまで油斷大敵ぢや、

其二十二

今日は宥観の江戸見物に立出でし日、淺草田原町の浪宅には主人の大泉周左衛門、臺所には名倉の勘治平、互に心うち解けて隔意なき主従となりぬ、

「や、勘治平、我等ばかりが日毎の見物に出ても濟まぬ事、いよゝ明日からは三四日つけて汝の番ぢや、はゝゝゝ人氣の薄い高野の籠とは雲泥の沙汰、がらり違うて流石に日本一の繁華、諺に生馬の目も抜き取るといふ油斷のならぬ素早い雑踏、なかゝの面白い見物ぢや、小酒でも飲んで快う見物せい」

「思召、有難う受けますれど、さて日限を定めて故國へ歸る身でなし、まづ當分お二方の濟むまで勘治平は臺所の世帯繕古が第一、やうゝ此ごろ麥飯の土鍋辯が手放れまして白い

仍 如 件

釜飯も焦さず、これからの修行は味噌醬油の汁加減、は、は、は、

『その汁加減より世の中の人加減が著しいぞ、勘治平、此ごろ近所の奴等、頻りと足音を忍んで物影より差覗く體ちや、また我等が出入の朝夕、仔細あり氣に目を敬て、私語く體ちや、じたい彼奴等、この三人の男世帯を何と申うて居らうな、もし留守番の汝が耳へ、ちらと噂の風でも吹き込まぬか』

『や、それに就いて臺所を常住居の勘治平、をりく風聞も耳へ入りまするが、儲とるに足らぬ世間の蔭口、つまりは一家の世帯に女氣のない事と、三人が三人とも主従おのく、異な體で一切江戸風のない事と、わけて不審は何をするやら、これといふ世渡りの業がない事、は、は、は、こりや田舎と格別の人情、さもあらう事かと思ひまする』

『は、は、は、それだけの事か、人は誰しも身の事に氣は付かぬが、なるほど、大の男が楊枝

を削る江戸の目より見れば、そこちや、そこちや、あの省觀に一時も早う結髪させて、浮世の男に仕立てた上、また汝の身體も砥石にかけて五六寸を磨減さずばなるまい、は、は、は、ツは、は、は、は、時に勘治平、はや今日も夕暮に近づいたが我にも汝にも晝までと言ひ残して出た省觀、何として斯う遅いぞ、鬼の棲む里へ丸裸のま、抛け出しても大丈夫な天生ながら、馴れぬ江戸の市中に人目を曳く半僧半俗の異形、もし不意の面倒にか、ツては居らぬか、ふしぎの縁で何とやら肉身の實弟と思ふ奴ぢや』

そのまゝ夕餐の膳に向へども歸らず、夜に入りて燈火の影に待てども歸らず、いつしか淺草寺の初夜の鐘の音に耳を敬つれど猶いまだ歸らねば、ものに動せぬ大膽の大泉周左衛門も今は寢られぬまゝの兩眼、ばちりと開けて終夜、眉うち擧めながら、はや曉け渡る東天の鴉の聲となりぬ、

仍 知 件

されど有観、いかにせしか、その日また歸らず絶えて音便なし、

其二十三

天生の大膽、自然の才氣、案外の工夫と事に當つて不動の根性、物に應じて即坐の頓智、十六の新發意としては古今に凡例あるまじき不思議の逸物、あの荒法師の頼覺房さへ別離に臨んで一念轉化の行末を怖れしほどの有観ながら、災禍の厄神は音もなき不意の横合より家さへ國さへ引倒すべき魔力あり、

まして浮世も浮世の頂上、その塵を積み上げし大舞臺の江戸には馴れぬ身、もしやと思へば、浪宅に残る周左衛門いよく身を落著け難し、

きのふの晝までに歸るべき筈、それが夜に入り夜を曉けて今日の朝となり、また晝を過ぎて夕陽を近きころまで、さす影もなく通ふ音信なき今は南無三寶、正しく不時の災難に出逢う

たり、

されど周左衛門この身も此大江戸には馴れぬ不案内、たとひ一切不通の紀州家を訪うて親類縁者の手を借ればとて、いはゞ大海の底に小石を探る業、頼覺房の添手紙ありとは聞けど、その手紙を残して我にも告げず出で行きし上は、番町の高田とやらへも訪れぬ筈、おもへば四里四方、東西南北、いづこの的もなし、

けに雲を攔む諺、勘治平も自己の拳に自己の毛脛を叩きながらの無念さ、これが紀州の本國一圓ならば宙を飛び廻つて土を掘り草を分け見る詮議もすれど、悲しや現在こゝに住む田原町の浪宅を一步立出づれば盲目に等しい我と、六尺の大兵を狭き臺所の板の間に躍らして泣きぬ、主人の周左衛門、無言のまゝ、兩眼を閉ちて暫時は木像の如くなりしが、やうく組み腕を解いて勘治平を見返りぬ、

仍如件

「や、ふと思ひ付いたぞ、よくは知らぬが兼てより聞き及ぶ、この江戸に男達と稱へて到るところ繁華の町々に限りもない多くの下種奴を子分に持つとの事、加之も此奴等、それなく平生より大名旗本の出入あつて、いざ不意の人数入用の節は何時たりとも整へて差入れるが家業のよし、もはや力にも智慧にも及ばぬ今は只これ金の沙汰ちや、その者どもに金を與へて四里四方を限なく探し出せば、さらぬも人目に立つ半僧半俗の異形、それに委しい人相年齢を添へて此奴等の手を借る外に工夫も分別もない、勘治平、この淺草に聞えた男賣の伊達者、どこに住んで何といふ奴か尋ねて来い、面と名を看板にするからは往來の人に聞いても分らうぞ、急げ勘治平、事の次第に依つては一時の取捨ちや、急げ」

勘治平、はッと答へて入口の戸に音高く額を打付けながら、そのまゝ一竿も出さず門外の方へ飛び出しぬ、

其二十四

こゝが江戸市中いづこの町やら、我また何のためやら、方角さへ得知らぬ見物の途中、うかとせし身の頭上より大喝一聲、御用の二字に捕はれて、そのまゝ獄屋に投げ込まれし宥観、夢の如し、

まして十六の今日まで俗界を隔てし千古靈跡の山に育ちながら、浮世も浮世、その浮世の塵の渦を巻いて立上る江戸繁昌の中央へ始めての還俗坊が、突如として思はぬ不意の額に閃く赤總の十手もろとも、脚下を蹴返されて捕られし時は、天生いかに逸物の宥観も身を翻すへき違なく、あはれ其まゝの囚人となりぬ、

叫ぶ奴は竹細工にせよ薬人形にせよ、天下取の威勢を戴く御用の聲には、智者も勇者も道理も人情も只これ言下粉碎の世の中、わけて十六の還俗坊主は小石を擲んで淵に投ずる如く、

出るところこへ罷り出て申し開けと喝破せられしが、さて出るところへも引出されねば四方闇  
 黒の牢獄に申し開かむ道も寸隙もなし、出家方便、在家正道といへど、末世の出家枯草に等し、  
 いづれ再び芽を吹き出ぬ枯草の我ならば、一日も早く此ま、朽ち果て、土になりたし、いづ  
 れ浮ばぬ不運の水底ならば、一日も早く此ま、溺れて藻屑となりたし、噯や田原町の浪宅に  
 我行方の空を探し求めむ、せめて斯くなりし我身の現在を曉の夢になりとも知らせし、  
 諺にもいふ現世からなる地獄の沙汰、その囚屋に投込まれて獄卒の手に蛆虫の如く取控が  
 れ、放火竊盜の悪漢に肩を押され膝を組み敷かれて鐵窓の下に繋がれつゝ二日二夜に過せし  
 が、流石に佛徒より出でて加之も自然の性に不敵の宥観こゝに観念の胸骨を据ゑながら自若  
 として我身の末を運命闇黒、當今の在家また闇黒、わけて天下政道の光輝を放つべき此大江戸  
 に白日青天の下、そもく我かく何がために捕はれたるか、たゞ一言ながら捕吏の口より正し

く宥観と叫びし上は、黒白方圓の人違ひでなし、人違ひでなき我に眼前いかなる罪ありしか、  
 吹き来る無常の風は老少不定、襲ひ来る禍災の厄は賢愚無差別、人間この世にありて生滅の  
 外に時々刻々、禍福吉凶、固より覺悟の我ながら、この浮世に出でて未だ是非善惡の巻にも  
 踏み入らぬ初心の首途を、忽ち斯る不意の闇路に押込められて倒れむ事、無念の至極、心外  
 の骨頂、されど五尺に足らぬ十六の皮肉は盤石の下に生き伸びむとするの吞吐に任せし折し  
 も、三日目の朝、牢獄の片隅に眼を閉ち頭を垂れ身を縮めて膝を抱きし耳元へ霹靂一聲、

「この還俗小僧、お調べぢや、さア出ませい」

はッと思はず打仰げば、無頼兇惡の首坐を占めたる牢名主の手に襟首を掴まれて引摺り出さ  
 れ、無事に戻れと叫ぶ聲もろとも腰骨を蹴飛ばされ、物を抛ぐるが如く囚屋の入口より突き放  
 されし宥観、よろくとせし面上を待ち受けし獄卒に打たれ、左右の兩手また宙に吊るが如

仍如件

く、ぐツと捻ぢ上げられぬ、

其二十五

江戸市中を見物の途上、おもはぬ不意に捕はれて、一言半句の違もなく其まゝ囚屋に投込まれ、白晝なほ闇き鐵窓の下に三日三夜の後、やうく始めて引出されし宥観ほツと額越に蒼穹を見上げぬ、

天は一點の雲なく晴れ渡れど、我身の現在、こゝに如何なる災厄の餌食となるやら、いまだ霽れやらぬ胸三寸を五寸釘に打たるゝ心地しながら、たゞ生れ得たる自然の不敵さと學び得たる修行の觀念に身も慌てず顔色も變へず、傳へ聞く天下黑白の決斷所、古來幾何の涙に洗ひ酒せし白洲の小砂利に押据ゑられ、頭上より鐵槌をもて打下さるゝが如き權威の下、そツと仰けば、正面の奉行を閻羅王として左右の廳に居流れたる隨從谷類の徒輩、目を怒らし肩を時

て、牛頭馬頭の鬼に似たり、

『高野山明王院の新發意宥観、確と其方が、面を上げい』

うてば響く宥観、この一言を聞くや否、はツと思はず身を動かして、人知れぬ自己が小膝を音なく叩きぬ、

さては高祖大師の靈跡を賣物にする末世一山の奴原、この我を無邊の法界に包む能はず、また咒縛の法力に止むる能はず、加之も最勝會の相撲に抛け殺し得ず、おめく影を見送ッて浮世の果へ取遁せし曠志執著の餘憤、この江戸の白金にありと聞き及ぶ野山詰所の手より内々そツと俗界權威の奉行所に横車の訴訟を起したりと、思へば忽ち焰々たる猛火の如き宥観、十六の身にあるまじき面魂を振上げ、やうく生え伸びたる若草山の坊主頭を擡けて、すらりと置き竝べし木像を見るが如き體、讀經に馴れし聲まで朗かに澄み渡りぬ、



「は、元は高野山明王院の新發意宥観、只今は淺草田原町に浪宅いたしまする遠俗もの、今年十六歳」

「いかなる仔細あつて高野山を遁け伸びたか、つゝまず白狀せい」

「恐れながら宥観、夜に紛れて遁け伸びは致しませぬ、去るべき仔細あつて白晝に山を立退きましたもの」

「や、案外に言葉の性根ある奴、その仔細具さに申し上げて見い、何のために立退いた」

「糞騒動のため」

「だまれつ、不埒もの奴、こゝを何處と心得る」  
「は、十六の今日まで佛徒の端くれに育ちまして、高野山の外は一切、いまだ世上に馴れませぬ塵外の身ながら、こゝを如何なる御場所かは篤と心得居りまする、なれど野山退去の

源因は正しく糞騒動のため」

「こりや待て、篤と御場所柄を辨へながら、わざと汚らはしい言葉を重ねし上に、萬一の過言あつては、其方の爲にならぬぞ、慎んで申せ」

さては一山の野狐ども、おのれ等が踏み破られし法衣の袖を恥ぢて糞騒動の臭氣を包みしまへ、他の事より我を訴へたりと思へば、この糞講釋こそ大切の要目、あくまで糞に嚙り付いて糞の一點張に押通さむと、宥観いよく憚らぬ糞度胸の體、

「およそ人間、口より食物を嚙み入れて臀の穴より屁出しまするもの、これを美はしき言葉の綾に織直して、そもく何と申し上げませうや、まづ此義を伺ひます」

其二十六

臭きものに蓋するとは世の諺と思ひの外、今や正しく高野一山衆徒の事なりと、そもく壇

上へ屁出せし臭氣紛々の源因より最勝會の相撲に至るまで、いち／＼具に糞騷動の所以を申し立て、平然たる宥観の體に、無言のまゝ聞き居たりし奉行、飯尾豊後守、おもはず正面の座を乗り出しつゝ、今更の目に其顔じろく／＼打守りぬ、

『先刻より下役の者に向うて申し立てた仔細、よく分つたぞ、なるほど其山に育つて其山の靈跡を汚した罪はあるにせよ、居るに居られず立退いて還俗いたした申分は其方にあるやうぢや』

『は、有難く心得まする』

『但し他の寺門とは違ひ、歴々の所領あつて地頭の格式を保つ高野山、その高野山より新發意の身を以て江戸表へ出奔の曲者召捕の上、本山の沙汰として白金の詰所に引渡してくれとの訴願ぢや』

『恐れながら只今の御意、立退いて還俗いたした申分はあつても、やはり野山の訴願に依つて此まゝ白金の詰所へ』

『いや、渡す、渡さぬは本人の聞くべき事でないぞ、時に其方、何者の子で幾歳の時に佛弟子となつた』

『父、母、ともに、いかなる者か、二歳の曉、高野山の麓に捨てられましたるもの幸ひ明王院の師の坊に拾はれて』

『む、捨子か、兩親の名でも書付けて無かつたか、高野山の麓、何と申す土地の捨子ぢや』

『山上より三里の麓、學文路宿の町外れ大榎の蔭と聞き及びまする、また父母の姓名もななく、たゞ東國武士某一子、この七字が、うみの親の記念と師の坊より平常に申し聞けられ居りまする』

「親なく、親戚なく、たゞ麓の捨子が山上の僧侶に拾はれて、そのまゝの得度いたした者ぢやないか」

「は」

「して此、この江戸表へ何のために来たぞ。先刻、下役に申し立てた浅草田原町の浪宅とやら、それには十六の還俗坊、其方たゞ一人であるまい、如何やうの者と相住居いたす」

「佛界にも俗界にも一切の所縁なき身、たゞ東國武士某一子といふ七字を故郷の空と心得て、まゐりまゐする道中、紀州家の浪人大泉周左衛門主従の道伴となり、實は其者の許に」

「多年の世俗に馴れたものさへ、容易くは渡り難い世の中を、十六の今日まで塵外の山上に暮した還俗坊、此後、いかなる業もて身を過す覺悟ぢや」

「およそ半月の間、今日まで江戸市中見物の途上、いまだ迷ひたゞ一疋の餓死も見當り

ませぬ」

「む、面白いぞ、但し高野山の所望に任せ、もし此まゝ其方を白金の詰所へ引渡さば何とする」

「たゞ、運命と心得まする」

飯尾豊後守、おもはず幾度か首肯いて、さらに宥観の面體、しみじみ打守りしが俄に高き一聲、

「再度の沙汰するまで、従前の通り入牢、申し付けるぞ、なれど御三家方浪人衆の親戚として格別の取扱ひ、揚り屋へ入れ置く」

其二十七

尾羽うち枯せし浪々の身ならねど、南の端より流れ來りし東の空、その浅草田原町の夕暮に

仍 如 件

昔を忍ぶ詫住居、

まして一身、いづこの里にも天晴れ立つべき筈の男ながら、天下に羽を伸ばす三家の威勢、その紀州家より祿を召上げられ、身を追放せられし上は、可憐ら生涯こゝに埋木の花咲く春を捨て、立身の道なく、此まゝ行末の運を待つべく仕官も奉公も叶はぬ大泉周左衛門、はや夜に入りし浪宅の燈火に對ひ、壁に映れる我たゞ一人の影を友として、三日三夜、行方も知れざる宥觀の身、また今しも飛び出せし勘治平の歸宅を待ちつゝ、柱に背を持たせて腕を組みし折しも、門邊に人の訪ひ來し足音、さては勘治平が探し當てゝ連れ來りし男達とやら、この江戸市中を我物顔の町奴とやらか、下種ながら斯る事には、頼み甲斐のある奴と聞き及ぶ、それを伴ひ歸りしかと見れば、わざと内より火影の届かぬ門口に立ちながらの聲、

「紀州家の御浪人、大泉殿お住居、こゝで御坐るかな」  
待つ影ならで待たぬ他影、わけて折柄の迷惑、案に相違しながら、正しく身の出所まで添へての我名を呼ばれし周左衛門、

「仰せらるゝ大泉周左衛門この浪宅、いづれの方か、御姓名」

「いや、ちと内々の者で、憚りながら御意を得た上の事」

ぬツと入り來りしは一人の武士、はや鬢の霜毛ちらく五十三四年輩、著流しの巻羽織に目立たぬ茶絲柄の大小を帯びて、人品骨柄、どこやらに卑しからぬ風情、加之も慇懃の會釋振、眉うち顰めながらも周左衛門また座を迂りし慇懃の體、燈火を引寄せて掻立てつゝ、互に相向うて初對面の挨拶、

「御覽の茅屋に只一人の召使まで生憎の不在、ひらに此まゝ御免を蒙つて、御用を伺ひま

する」

「じたいの分らぬ者が不意に押掛けての推参、は、は、は、異な思召もあらうが、當時お手許に養はるゝ宥観と申す高野の還俗坊、三日以前に出たまゝの筈、其後の行方を御存じあらるるかな」

「や、その宥観は兎も角、重ねての義ながら、まづ御姓名を」

「いかにも其事、これは御念ぢや、私邸に罷り在る節は、飯尾作左衛門と申す氣樂者でな」

「は、御私邸と仰せらるゝからは、また別に御公儀の、御役目、いづれ様と仰せられまする」

「は、は、は、其事ははずとももの事、たゞ作左衛門で御意を得て置かう、見らるゝ通り供も召連れず只一人で推参いたしたほどの次第ぢや、實は内々」

「は」

「うちとけて談合いたしたい」

周左衛門おもはず手を膝より落して額越に伺へば、作左衛門また座を進めて小首を差出しぬ、

其二十八

飯尾作左衛門、多年こゝに町奉行の飯尾豊後守として善悪邪正の巷に馴れ、人の面體風俗より音なき息の呼吸までも遁さぬ眼中に大泉周左衛門を見て取ッて、可憐ら男を日蔭の捨物と思へる體、周左衛門また田舎武士の浪人ながら氏素性を保ちし名家の一粒種、虎の威をかる野狐の多き世の中に公私の分を隔てし慇懃の人品を見て、いつしか打解けし互の心と心

「お言葉に就いて伺ひまする、その宥観、只今いづれに居りませうや」

「召捕られて入牢の身」

「や、入牢、いかやうの罪で入牢の身となりましたやら」

仍 如 件

「知らるゝ通り他の寺門とは違ひ、領主地頭格の高野山、その野山に罪科あらば寺社奉行の支配なれど、その野山より寺領内の曲者として訴へし以上は町奉行の手に召捕つて當地白金の高野詰所へ引き渡すべきが定法」

「但し宥観、野山を立退いて、この、江戸表へ罷り出ましたる仔細」

「それは本人、年齢にも似合はぬ才氣能辯、いちく具さに申し立て、實は奉行を始め役人一同、感嘆いたしたと聞き及ぶほどの事、なれど定法の上が面倒ぢや」

「その御面倒、結局のところ、いかゞ相成りませうや」

「こりや事ぢや、まづ寺社奉行を定法の中央に押据ゑて、高野山と町奉行の雙方より渡せ渡さぬ一條の争議になるかのやう思はれる」

「さて、大事、もし此方様、其お奉行の處分に在らせらるゝ節は、何と御處置、遊ばさ

るゝやら、かゝる事には別して田舎者の萬事不案内、そと御洩しを願はしう伺ひまする」

「や、もし我等、その町奉行であらば、いッかな職分にかけても渡さぬ心體、じたい柔和忍辱の法衣を纏ふものが、わけて慈悲圓滿を千年の靈跡に保ち來つた高野山が、俗界にても事の行き詰るまでは避くべき筈の定法を權威の表に振廻して、たゞ一人の新發意を獄卒の手に追込むとは言語道斷の汰沙、加之も殺人放火兇盜の業でなし、その新發意の壇上を汚せし罪は罪として、はや既に最勝會の法樂相撲で相濟んだ筈のもの、さるを毒婦の怨念に等しく此、この江戸表まで執著の繩を打たんとするは世にいふ佛のあるところに鬼の棲む

諺、この邊の道理は當時の町奉行、よく心得て罷りあるけに聞き及べば」

「は、有難き仰せなれど、十六の還俗坊主たゞ一人の事より、大切の御役目と御身分に萬

一の

仍 如 件

「いや、十六の還俗坊は儲置き、たとひ半日の生命を保たぬ死際の不具者に就いても道理の上で争ふ時は天下の公道ぢや、次第に依つては人の首斬る奉行所に正道の慈悲あるか、また人の罪を助くる佛徒の本山に無道の邪惡あるか、は、は、は、こりや面白い世の中の試験ものぢや、但し正邪分明の曉まで、あの宥観うかと放し遣れぬぞ、もし今、許せば却つて敵の願に食まるゝ結果、たゞ痛はつて當分あのみゝ入牢させ置く方が本人のためかとも思はれる、まして宥観といふ小僧の天生、なか／＼の分別あつて加之も臆魂の動ぜぬ體、自然と逸物のやうに聞き及べば、狼狽へて泣の涙で身を損ねる事もあるまい」

「かくなりし上は、たゞ何事も偏に宜しく願ひあけまする」

「は、は、は、願はれても我等、手に及ばぬ事ながら、ちと仔細あつて以上の大略を存するものぢや、は、は、は、」

其二十九

年輩といひ風體といひ人品といひ、第一は宥観の身に就いて他より知れぬ筈の事まで委しく打語りし言葉の端々といひ、この江戸に馴れざる我初耳へは只これ聞くまゝの飯尾作左衛門なれど、もし或は町奉行その人ならむかと、大泉周左衛門、一入さらに慇懃の禮を盡して宵圍の門邊まで送り出しぬ、

されど町奉行その人ならば、思はぬ不意に草の葉の由縁もなき我浪宅を、わざ／＼何がために訪ひ來りしか、たとひ野山の振舞を憎んで宥観の身の末を憐れむとも、あれほど公私の分を立てゝ言葉の前後を謹むべき人が、そも／＼何のために供をも連れぬ情の夕暮に忍び來りしか、まだ勘治平は歸らずとも、事實の成行は知れたり、もはや男達とやら町奴とやらに用なし、もし連れ歸らば一應の挨拶に音物を添へて濟む筈、たゞ心に濟まぬは今の訪ひ來りし

情、その流れ出でし源泉を汲まむものと、浪人の手輕きに門口の戸を閉ぢて身の用意もなく、宵闇の星明りに透しながら飯尾作左衛門の影を追ひぬ、

追へば果して思ふに違はず、田原町の角より若黨めいたるもの二人、つと走せ出でて小腰を屈めぬ、

さては正しく其人か、よし然なくとも其人の職分に近く等しき人體、この上は後日のため屋敷を見届け公議の役目も知らむものと、いよく我影を潜めて後を追へば上野の方に向うて廣小路より斜めに神田の小川町に出でしが、ある武家の門前に立停りて一人の若黨に何をか私語きぬ、

その若黨その小門に入りつゝ、また取つて返して門外に出づるや否、俄に夜の大門を開きし眞正面より立入りぬ、

周左衛門、此方より此體を透し見て、幸ひ近處の紙屋に半紙一帖を求めながらあの屋敷を誰殿と聞けば、千石取の旗本衆その名は高田左門、

やれ不思議の縁ぞ、高田左門とは根來の頼覺坊が兄とやら宥観がために兼てより依頼の一書まで添へられし人、されど屋敷は番町と聞き及ぶに今こゝは神田の小川町、同名異人か、まして飯尾作左衛門といへば尙更ら其屋敷の主人でもなき姓名相違、

おもはず小首を傾けながら、半町ばかり門前を行き過ぎて、折しも通りかゝりし武家奉公の下人らしき男を呼び止めつゝ、おのが用あり氣に高田左門を問へば、近ごろ番町より引移られし御人と、同じ屋敷を教へて其まゝ立去りぬ、

いよく、諸は其の高田左門、あの飯尾作左衛門は途上に立寄りし客分と知りながら、なほも委しく問はむと、また四邊の町家に蠟燭一挺を求めて何氣なく武鑑談話を持ち掛け、果して

仍 如 件



當時の町奉行の五千石取の飯尾豊後守と聞き出しぬ、

其三十三

夜に入りて後、おもはぬ不意に立寄りし飯尾豊後守と、これを迎へて奥の小座敷に伴ひし主人の高田左門とは年來の友垣、互に隔意なければ膝を交へつゝ心も言葉も打解けての物語、

「御用の多い身、わざ／＼この夜分、いづれへの御歸途ぞ」

「平常に忙しい身は却つて物數奇の外出が面白うて、は／＼」

「忙中の閑日月、さも御坐らうな、その忙中に悠々たる閑日月あるほどの體でこそまた近來の名聞、蔭ながら喜び居りますぞや」

「いや／＼、その名聞も身の面目も入らぬ事、わけて昨今、奉行職が、とんと氣に濟まぬ心地、次第に依つては御役御免を願はうかと存じて」

「はて、異な事をいはるゝ、知行取の出頭出世は兎も角、公邊の御鑑定に叶つての職分、申さば器量の試し場所、それを氣に濟まぬとは」

「高田殿、お身と我等とは元來の他人ながら、ふしぎの御縁で骨肉に等しい永久の間柄、この飯尾が人知れぬ近來の苦しさを、友達甲斐に、聞いて下さるまいか、たゞ聞くだけの事、さて／＼人間、おのれの身に事のある時は我ながら案外の氣弱いもの、妻子よりも親戚よりも、これと思ふ打解けた同氣の友に割つて語れば、また少しの苦痛も薄らぐかのやう、實は飯尾作左衛門、豊後守としての今日、ふと思ひの外の當惑が御坐つて」

「當惑、貴方ほどの油斷ない御人が、まして豊後守としての上に思ひの外の當惑とは、お言葉までもなく高田左門、不肖ながら多年の友達甲斐に是非とも承りたい、たとひ如何やうの難事に致せ、うちあけて話されたい」

仍 如 件

「高田殿、この飯尾作左衛門め、これまで人にも世にも相應の名を知られてまるった五十三の今日、婦女兒輩の弄ぶ繪本の因果物語に落ちました」

「何、繪本の物語とは」

「面目もない次第、天下政道の一端を預かつて他の黑白を決断すべきものが、往昔の夢に残した自己の罪に今この身を責められて、いはず語らぬ心の辛さ苦しき切なさ」

「重ねぐ、異な事ばかり承る、じたい如何なる案外の義で、さほどまで平生に見受けぬ愁眉を寄せらるゝまで」

「恥辱も外聞も捨て、お身の前なればこそ、ありのままに申さうが、この飯尾豊後守、町奉行として十餘年以前に捨てた其、その我一子を召捕り、加之も白洲へ引き出し入牢させました」

「えッ」

主人の高田左門、おもはず膝を進めて其顔うち守れば、流石の豊後守も兩眼に溢るゝばかり男泣の涙を含みぬ、

其三十一

諺にいふ水の流と人の行末、もとは同じ泉の底より出でながら、互に別れしまゝの淵となり瀬となりつゝ、いかなる谷間を潜りし果に落ち合ふやら、うき世の離合集散、常なきかと思へば自然の運命まだ血筋の縁に定規あるが如し、

快刀亂麻を断つべき飯尾豊後守、千人の生膽を料理するほどの難事にも驚かぬ筈の目に思はず涙を浮べつゝ、多年の友と契りし高田左門に向うての物語、

「この作左衛門、實は飯尾家の次男、今でこそ少しは人らしい、世間の手前にも立ち公邊の

仍 如 件

役義も致せ、さて若年の頃は言語に餘つた大の横道者、父母なき後は兄親といふ、その一人の兄を手鞠に取つての我まゝ三昧、果は一門一家の親類にさへ見放され、また家を追ひ出されて勘當の身となりし後は猶更の放埒、この江戸に住み兼ねて、東海道を一年越に上方筋へ流れ行き、京に二年の月日、大阪に三年、その大阪も喧嘩の相手を殺しはせざれど、無残に六人まで傷つけしまゝ、身を忍んで泉州の堺へ落ち込み、町外の湊村に尾羽うち枯らした浪々の業、あらう事か兩刀まで賣り捨て、やうく傘を張つて其日の露命を繋いだ艱難中、重ね々、面目もない不所存ながら、これも今更かへらぬ若氣の至極、ふとせし農家の娘を誘ひ出し、その女と共に岸和田の片邊りに、夢うつゝの淫奔夫婦」

語りながら俄の無言、おもはず頭を垂れて兩手を膝上に置きつゝ、差俯けば、主人の高田左門、わざと微笑を浮べて興ありけに打解けし體、

「や、誰も若輩未熟の頃は、得て過失の多いもの、はゝゝなれど飯尾殿としては生涯たゞ一度の珍談ぢや、さほどの面白い珍談あつてこそ今日の飯尾殿、いよく身に光輝を増す道理、また不肖ながらも本生の氣を許さるゝ左門なればこそ、かゝる昔の内事も斯くまで打明けて言はるゝかと思へば、これが眞實の隔意ない友垣と申すもの」

「高田殿、儲これからが身に取つて猶更の深い罪、その女は産後の難病に死に果てゝ残つた一子これぞ正しく氏素性ある武門の種に生れし男子ながら、あはれや父が父なり時が時なり、わけて件の境涯に致し方もなく、懷中に抱き入れて朝夕その片田舎を貰ひ乳に一年餘りの後、つらく思へば逆も世に甲斐なき不運の奴、なまなか我手に育て、淺ましい境涯に連れ落さうよりは、東西も得知らぬ今のうち男を止めさせて佛縁の端に捨て、塵外の身を全うさせんものと、幸ひ近き紀州の高野山その籠の學文路宿へ東國武士某一子といふ七字

を親の記念として、高田殿、すやく睡ッたまの乳呑子を、この鬼奴が捨てました、忘れぬ二月の二十四日、雨氣を含んで空に星の影もない大榎の根下へこの作左衛門うまれて以來その時が始めての念佛を唱へて』

『お察し申す』

『その捨子いたした年の夏、また大阪へ流れ込んで、折から江戸の縁者が城代附となつてまゐつた者に出逢ひ、その者の許に暫時の厄介、しみぐと身の後悔いたした時も時、兄が頓死の報知に、この不孝不悌の横道者が飯尾家の主人となり、また今日の豊後守となつて十五年の間、他人には固より現在、連れ添ふ今の妻子にも得いはず、たゞ自己一人が夢にも寢覺にも忘れぬ其、その高野の麓へ捨てた往昔の一子を高田殿、怖ろしや因果の業か、召捕つて入牢させましたぞ』

其三十二

わがごとく何がために縁なき我浪宅を訪ひ來しかは知らねど、その飯尾作左衛門を町奉行の豊守と知りし上、宥観の身に就いて餘所ながら深き情の言葉は千萬人の力草、加之も影を追うて其人の屋敷かと思へば、思ひもよらぬ高田左門、これぞ根來の頼覺房が兄と聞き及ぶのみか、その高田が方へ夜途に立寄りし飯尾は正しく知合の間柄、ふしぎの縁の縁を手繰れば宥観の身の末、猶更ら易しと大泉周左衛門、そのまゝ小川町より引返しぬ、

禍の起るも思はぬ不意、幸の來るも思はぬ不意、たゞ束の間一時は雨となり風となりる日となりて、人の運命は轉ぶが如き表裏輾轉、かくとも知らぬ勘治平、宥観の行方のみか俄に立出でし我不在へ歸り來て、ぬしなき宿の戸口に嗚や猶更の心を痛めむ、力は世の常に餘りて身材は六尺を超ゆる大男ながら、元來の器

仍 如 件

は淺く加之も事の分別に足らぬ勝の正直者、一入さらに哀れなりと、足を早めて上野の廣小路へ差かゝりし頃、まだ夜は更けねど往來の人も稀なる闇を照して、三枚橋の方より近づきし提灯の火影を何心なく見れば、我家の紋所と同じ丸に鷹の羽、

片田舎の瘦村でさへ紋と名の同じ他人は珍らしからぬ凡例、まして日本一の大江戸に寸隙もない百萬の人数さらに怪しむべき筈はなけれど、あれこそ紀州家に人も知りし大泉の先祖傳來、あの紋所を闇の馬上に蹄の音高く照せば、藩中の諸士いづれも道を開いて頭を垂れし其家の子孫が、かく世に落ち果て、犬に吠えらるゝ浪々の淺ましさと、ありし昔を忍びつゝ刀の柄を袖に巻いて思はず佇みぬ、

家の盛衰、身の變遷、羨むにもあらず待つにもあらず、たゞ何となく戀しく懐かしく立停れば、一人の二郎に其の提灯を先立たせ一人の若黨を背後に従へつゝ悠々として出で來りし羽織袴

の武士、周左衛門の前を行過ぎながら、ふと振り返りて火影に差覗くや否、はツと思へる體、

「や、本家殿か」

周左衛門また驚いて見直せば、故國の我分家に同じ大泉を名乗る再從弟の同苗甚之丞として、一門のうちながら元來の家風も格式も等しからねば平生より疎遠の間、されど逢へば互に無縁の他人でなし、

「これは案外、おもはぬところで逢ひ申した、周左衛門、主家を立退いて半年も経たぬ今、はや既に浪人馴れた此の風體を見られい、諺にいふ人と魚とは流れ行く水次第ぢや、は、ムムムいづれ其うち、また時機もあらば」

言葉を残せしまゝ立去らむとする周左衛門の袖、甚之丞おもはず慌てゝ取りぬ、

其三十三

仍 如 件

一門の同族ながら元來の家風も違ひ、わけて父が最後の時は相手方の威勢を憚りて親類甲斐の手も足も出さざりし奴の一子、また我ためには再従弟なれど君前不首尾の家を嗣ぎし孤子とて平生の疎遠に打過ぎしほどの心體、その同苗甚之丞に思はず逢ひし夜途の袖を捉へられて、加之も今更ら俄に慇懃の挨拶せらるゝ周左衛門、いよく面白からず眉を擧めぬ、

「相傳の君に見放され傳來の家祿を召上げられ、加之も追放せられしほどの出世冥加に盡きた周左衛門、もはや同苗とて紀州家の人々に縁は持たぬ覺悟ぢや、折角の御言葉ながら我等の身勝手、このまゝ別れ申さう、但し大泉といふ同じ姓を名乗らるゝ上は自然の家筋に取ッて他人ならぬ事、随分お身大切に行末の武運長久、祈りまゐらす」

「やれ、また本家殿の意地が出る」

「何と致さう、當世に流行らぬ此、この意地が父子の持病ぢや、それがため父は算盤の珠に

外れた最後、その一子は世に落ち果てた浪人、はゝゝゝ」

「なれど父御の墓石は今なほ其まゝ本國の菩提寺、まさか背負うて出られた事もない筈」

「異な事ははるゝ、荷馬でなし地車でなし、わけて百五十五里の山河、父の石塔は背負うて立退かぬが、父祖傳來の君に盡した手柄も其まゝ、紀州家の本國へ残して出た筈、や、うかく、夜の立談に無用の暇とツた、御免なれ」

あとも見返らず、袖を拂うて立去りし背後より甚之丞また足早に追ひ來り、聲を潜めながら呼止めぬ、

「本家殿、本家殿」

周左衛門、闇にも輝く兩眼、ぎろりと光らせて振り返りぬ、

「その他に用ばし御坐るかな、ちと差當る事あつて浪宅へ急ぎの身ぢや」

仍 如 件

「お手間とらさぬ、只今いづれに浪宅せらるゝか、それ承知いたしたい」

「先刻も申す通りの事、もはや親類縁者として紀州家の人々に用を持たぬ身、秘すではない、浪宅へ御案内、此方の迷惑に存する」

「いや、わざと推参しようでもないが今日、この上野寛永寺の寺中へ御用の義でまるツた歸途、かく思はず御出逢ひ申したは不思議の幸便、實は今、お耳に入れた父御の墓石ぢや、貴方お家を立退かれて後、いろく重役の詮議あつて、いはゞ我まゝ勝手の喧嘩死いたした者の石碑を其まゝ、第一あれほど人の目に付く立派さは主君への恐ありとの事、まして以後の訓戒に斷絶追放の廉を明白にして、氣の毒ながら取潰さうか、他所へ運び退けんかとの評議最中、ちらと洩れ聞いて流石に縁者の身の一入、辛く存じた折柄」

其三十四

はや夜に入りて猶更ら氣も心も上の空、足も地に付かで田原町の浪宅へ走せ歸りし勘治平、燈火かき立て、我を待たるゝかと思ひの外、門口の戸を閉め切つて火影も漏れざるのみか、鍵さへ固く主人なき體に、思はず眉を擧めて軒下に立ちぬ、さては我歸宅の遅きを待わびての工夫、また別に思案の道あつて出で行かれしか、但しは馴れぬ廚の面倒さに夕餐の食事せむとて出られしか、平生うちとけて馴々しく物いはねば、軒を竝べし近所合壁に聞き合しても知らぬとの挨拶、大力の業に音なく門口の鍵を捻切り裏口の戸を外すは易けれど、田舎者の勘治平、そのまゝ其處を動きも得せず、頻りに往來の人影を透し見ながら六尺の大男、しよんほりと闇き軒下に立てる體、あはれや繼母に閉め出されたる小兒の如し、

如件

折しも夜更けし草履の足音、人知れぬ心のうち、しめやかに腕を組みつゝ歸り來りし主人の周左衛門、

「誰ぢや、勘治平か」

「や、御歸宅」

「そこで何をして居る」

「一時ばかり前、宵の口に戻りましたれど、門口も裏口も」

「は、ふと急用の事でぢや、かうも遅うはならぬ筈が案外、また思はぬ途中に暇どツてな」

それと鍵を渡されし勘治平、門口の戸を開けて黒闇を探りながら、燈火の見ゆるまで其まゝ悠々と軒下に待ちし周左衛門、靜に入りぬ、

「どうぢや勘治平、あの事に就いて頼み甲斐のある男、探し當てたか」

「何が儲、この不案内者、それから其處と聞き傳へて、やうくの事、當時この江戸で音に聞えたものを尋ね當てました、ところは山谷堀、今戸橋の片邊で橋の名を其まゝ今戸の庄五郎と申す男」

「む、土地の橋の名を人に呼ばるゝ男、いづれ世に聞えた名物、武家ならば大名分ぢや」

「お言葉の通り江戸なればこそ斯やうな男、見るが始めて、いかにも町人の大名生活、年々五十一二で、小兵ながら骨格の張つた目の玉の輝いた赤ら面を抜上げの大額、委細うちあけて頼むといへば機關人形のやうに首肯いて、土地に不馴の御浪人衆は猶更の御迷惑、及ばずながら庄五郎が頼まれましたとの打解けた挨拶、ついでに明朝これへまゐる筈」  
「なるほど、それが聞き及ぶ町奴の男達といふものぢや、なれど勘治平、おもはぬ不意の事で



宥觀の成行は知れたぞ、もはや其男に用はない、但し頼み放しのまゝでは濟まぬばかりか、わざ／＼來られては猶更に氣の毒さ、おぬし明日の朝、夜あけぬうちに南向いて、音物の目錄に謝絶挨拶を添へてくれ」

「や、行方が知れましたか、いづれに、何として」

這ひ出す如くに問へば、周左衛門、飯尾作左衛門が訪ひ來し事より高田左門が事まで、また歸る途中に同苗其之丞と出逢ひし委細を語りし後、何とやら俄に目を閉ぢ容を更めて思ひ入りし一思案の體、されど生れ付いて言葉は妙し、

「ぬしの今戸へ南向く時、我また紀州家へ行かて叶ふまい」

其三十五

人は浮世を追うて走るが如く、浮世は人を欺いて弄ぶが如く、その間に運命の神は手を拍つて

笑ふが如し、

おもはぬ不意に我浪宅を訪ひ來し情の飯尾作左衛門は、果して町奉行の豊後守、その立寄りし小川町の屋敷は根來の頼覺房が兄と聞き及ぶ不思議の縁の高田左門、もはや宥觀の行方は知れたり、加之も萬一の時は手足を踏み入れて救ひ出すべき方便もありと、大泉周左衛門、こゝに雨後の月見る心地しながら、その歸途に自己また身に降りかゝる涙の雨、思はぬ不意の同苗其之丞に出逢うて、きけば故郷の空に残せし父の墳墓の取潰し沙汰ありとの事、

たとひ不忠不義の大罪ありとも、既に時は去り事は過ぎて現在その家なく人なき後は自然に詮議の沙汰もなき筈、さるを何事ぞや、よし無益の喧嘩口論にせよ、兩成敗たるべき一方の相手は閨門の香粉に縁あるがため、今なほ歴々として時めきながら、その一方の我家のみ相傳の知行を召上げられ由緒の家門を取潰され、加之も一子の嫡流こゝに追放せられて、生涯

の仕官奉公も叶はぬ浪々の身となるのみか、今更ら父が墳墓を掘返して取退けむとは鬼畜に等しき業、さては君前を闇として奥向の紅白粉に媚びつゝ、縁に繋がる横しまの出頭人へ詔ふ奴等、おのれやれ、狼狽眼に見違うたか、この周左衛門當年二十八の男、そもく子として年経し父の白骨を其奴等の手に觸れさすべきや、

されど平生の無口、事に騒がず物に動せぬ天性、鐵火を呑むが如き苦痛、じつと堪へて顔色にも出さず、腸を劈く悲憤の涙も目に浮べず、その夜は其まゝの枕に東天の鴉聲を待ち受けて起き出づれば、はや今戸橋の庄五郎が許へ行かむとて勘治平も飛起きながら朝飯の用意、「や、勘治平、ちと心が急ぐ、今朝の飯は欲しくない、なれど汝は、ゆるく喫へて出い、前夜のうちに包み置いた今戸橋への目録こゝにあるぞ、働かずとも快く頼み甲斐のあつた男、随分その氣を損ぜぬやう慇懃の辭儀して來い」

こればかりは浪人ながらも流石に用意の禮服、麻の上下を風呂敷のまゝ小脇に抱へ、誰が目にも今の境涯には過ぎたる父祖傳來の業物を腰に横たへ、いづこに憚る身ならねど編笠に面を包んで、ふらりと田原町の浪宅を立出でし大泉周左衛門、一町あまりも行過ぎしが、俄に立戻つて門口より勘治平を呼び出しつゝ聲を潜めぬ、

『さして言ひ置くまでもないが、紀州家の上屋敷で同苗、大泉甚之丞といふ者の許へ行くぞ、自然また歸宅が遅くならうとも心配すな』

其三十六

四代以前の分家、現在の我とは再従弟の間、加之も故郷と江戸に父子うち揃うて無事息災の身を持ちながら、たとひ家名斷絶の後にもせよ、おのれがためには大泉の本性たる宗家の我父、その墳墓を發いて取退けむとするほどの言語道斷、一句の申立も得せざる腰拔、もし前

夜この我に出逢はずば、おめく手束ねて餘所に見るべき白癡面、まして一門とはいへ平生より元來の疎遠に打過ぎし奴、猶更ら斯る時は草の葉蔭にもならざる卑怯者なれど、追放せられし身の悲しさ、兎も角その甚之丞が許を訪うて、分別する外に道なし、やうく曉けし空に鴉の聲を聴きしのみ、まだ市中の屋の棟に前夜のまゝの露滋く朝日の影も渡らぬころ、田原町の浪宅を立出でし大泉周左衛門、そもく此の江戸を見物の最初、何は俵置いて父祖傳來の勤めし所と、第一に紀州家を人知れぬ懐舊の涙に注ぎしかば、外の不案内に似ず道を急いで紀尾井阪の屋敷へ行著きぬ、たゞ一口にいへば喧嘩口論の決闘なれど、事の起因は武士道の意地に依つて身を過ちし父、人目には嘸や君を恨みし血氣の不所存者と唄はれむが、藩中に持餘せし君寵の狂犬を斫つて追はれし我、父子ともに男の一分を立て、斯くなりし上は、今更ら家も知行も惜しからねど、南龍公以來の

名臣中に數へられし大泉家の嫡流、馬の嘶く聲もろとも轡を鳴らして出入すべき筈の周左衛門が二十八の今日、浪々の姿に頭を垂れ肩を凋め腰うち屈めて門番の下郎にさへ憚りながら、平生の心に打解けぬ縁者の端を便りて蟲の如くに這ひ込むかと思へば、諦めし身にも何とやら無念なり心外なり、まして父の片敵手は其儘の家名相續に今尙全盛の眞最中、わけて年經し父の墳墓を掘返され形も全からぬ白骨まで其奴等の手につけられむとは、悲憤の涙を呑み込み、沸き返る腸を静めつゝ、今日まで本國の日蔭に押込まれて江戸勤番の下司下郎に顔を知られぬが結句の侍僮、編笠を脱ぎ刀の柄を袖に巻いて小門の此方より中腰に進みながら、兼て御存じのもの當お屋敷の大泉甚之丞殿に御意得たしといへば、見苦しからねど周左衛門の浪人姿を打守る門番、素頭も動かさず目を剝いて俄の大聲、

『通らッしやい、その二重門の塀際を右に折れて當れば諸士の取次所、頭をあけて脇目はな

仍 如 件

五〇九

りませぬぞ』

大盤石に押へらるゝとも容易くは首骨の曲らぬ周左衛門、わざと慇懃に會釋して打通りながら、教へられし諸士取次所の入口に、またもや腰を屈めて額越、

『大泉甚之丞お長屋、いづれに御坐りまする』

其三十七

物頭の家ものがしらに生れて千五百石の嫡流ちやくりゆう、父の死後は殆ど捨扶持の日蔭者ひかげものとなりしが、流石さすがに聞えし大泉周左衛門おほいづみしうざゑもん、また江戸詰えどづめの勤番衆きんぱんしゆうにも名ある知行取ちやくちとりこそ自然しぜんの交際まじはりあれ、たゞ徒士の輩かちぞもがらには顔さへ知られぬを結句むくごの僥倖しあはせ、そのまゝ無事に門も詰所づめしよも打過ぎて同苗甚之丞どうなへしじんのじやうが住居すまひの入口いりぐちを差覗さしのぞきながら、わざと聲こゑを潜めて案内あんないを乞ひぬ、

こゝにも幸さいはひ本國ほんこくより連れ來りし家來けらいならで、この江戸言葉えどことばに馴れたる下郎げらう、甚之丞殿御在しんじんのじやうのござい

宿しゆくかと問とふをも待たず、いざ此方こなたへといふ顔かほみれば、果はたして前夜まへよの途中ちゆうちゆうに主人しゆじんの供ともせし提灯ていとう奴やつこなり、

御免ごめんなれと一室ひとむまに打通りし周左衛門しうざゑもん、茶ちやを運はこばれ菓子かしを持ち出もされたるまゝ、待まちてども甚之丞しんじんのじやうの出いでで來きたらねば、襖越ふすまこしに聲こゑかけて、

『御家來衆ごけらいしゆう、甚之丞殿しんじんのじやうのござい、いづれかへ出でられましたかな』

聲こゑに應おじて一人ひとりの若黨わかたう、によつきり有馬筆ありまふでの如ごとき襖ふすまの間あひだより首くびを差出さしぬ、

『主人義しゆじんぎ、早朝さうちゆうより急きふの御召ごめしで先刻せんこく御殿ごてんへ、その節せつに申まうし置おきましたは、貴方あなた様さまいづれ入いらせらるゝとの事こと、暫時しばらくお待ち下くださるやう』

また其そのまゝ首くびをぬツと音おとなく引入ひきいれて、隔へだての襖ふすまを閉とぢぬ、

勤務つとめの身みは是非ぜひなしと、周左衛門しうざゑもんたゞ一人ひとり、その一室ひとむまに端坐たんざして無言むごんの體てい、凡およそ一時ひとときあまり

仍 如 件

を待ちしが、急お召に依つて御殿へといはれし上は催促のならぬ事、まして他家と違ひ我た  
めにも父祖傳來の君と仰ぎし屋敷のうち、猶更ら以て追放の身、いと萬事に憚りて處女の  
如く差控へぬ、

差控へながら周左衛門、つらく思へば空吹く風に等しき人の行末、いづこが果やら終やら、  
さしての罪なきに家は潰され身は追はれて、加之も父母なく妻子なき獨身孤影の我、たとひ  
此まゝの生涯を知らぬ他國の浪々に流れ渡るとも、もはや再び過ぎし昔の小蔭を訪うて立寄  
るまじと思ひしに、思ひの外は今またこゝに曳かれ來て、平生うち解けぬ縁者の端に肩を縮  
めつゝ其歸宅を待たて叶はぬ不運の身、無念なれど悲しや時得し小人原を相手として、父が  
墳墓を發かるゝの恐あればこそ、  
さりとて斯くなりし上は、斯くせし奴原を敵に取つて荒立てむよりは、たゞ靜に子として父

の靈を守るの外なし、もしや叶はずば江戸より紀州まで往來の日數を乞うて我手の涙に墓を  
取退け、その白骨を首にかけて去るべしと、人知れぬ思案の臍を固めぬ、されど今かくと  
待ち受けし主人の甚之丞さらに歸らず、加之も留守居の若黨と下郎さへ、いつの間にか立出  
でて我たゞ一人を取残せしまゝ家内に音なく聲なく、ひっそりとして空屋の如し、  
周左衛門、おもはず眉を擧めて入口を差覗けば、はて不思議や、客の我ありと知りながら戸  
を閉ぢたり、

其三十八

東天の鴉聲と共に起きて田原町の浪宅を立出で、やうく朝飯の濟むや濟まざる頃に訪ひ來  
し我、まして途中ながら前夜あれほど約束を固めし我、いかに急御用とはいへ、もし急お召な  
らば猶更ら早く御殿を下るべき筈の甚之丞、待てどもく更に歸らぬのみか、はや正午近く

仍如件

なりて留守居の若黨も下郎も何處へか立出でしまゝ影なし、加之も案外、何事ぞ我た一人を置去にして入口の戸を閉ぢむとは、

周左衛門、おもはず眼を光らして一室の四方を見廻しながら、さては底あり、この我を深いところへ引入れしか、もし萬一の時は入口の戸を蹴破つて飛び出すも易く門番の奴原を人礫に取つて遁るゝも易けれど、茲は正しく父祖傳來の祿を食みし舊恩の江戸屋敷、わけて現在の我は追放せられし浪人扱ひの身、うかく動かば却つて人知れぬ敵の術中に落込むべしと、元來の大膽、そのまゝ悠々として茶盆を引寄せながら、主人の心と共に冷き茶を汲んで一口、ぐツと呑み乾しぬ、もはや尋常事ならずと見て、不敵の腸を押据ゑし周左衛門、第一は父が墳墓の沙汰、その事の結局を聞くまでは、一寸も動かじとの顔色、我家にあるが如し、折しも入口の軒下に人の足音、頻りに戸を叩きぬ、

『大泉殿、大泉殿』

呼ばれて周左衛門、何心なく振返れば、横の半窓より差覗く三四人の諸士、

『や、大泉殿でない、こりや見知らぬ人ぢや、大泉殿いづれへ往かれたか、家來の者も見えぬぞ』

はゝと高く笑うて打連れながら過ぎ去りし體に、周左衛門、おもはず死毒を舐めしが如く満面を皺めて差俯けば、また何物やら通りがけに戸を叩く音、

『この白晝に門戸を閉すとは何事、や、幸ひ今日の非番に骨休めの書寝めされたな、はゝゝ』

またもや半窓より差覗いて案外の人違ひに驚ける體、されど此奴また其まゝ空嘯いて行過ぎぬ、

仍 如 件

いよく、儲は謀られたり、加之も人もあるべきに甚之丞め、おのれ親類縁者の端くれに血筋を  
 持ちながら、前夜たまく、出逢ひしを幸ひの手柄顔の小人原の綱となつて我を引寄せし上、  
 その姿を隠して斯くまで嘲弄せむとは諺にいふ獅子身中の蟲けら奴、わざ／＼探し出して  
 刀の汚れ、見付次第に蹴倒して踏み殺しくれむと思へども、この戸一枚を破れば忽ち狼藉者  
 に落さむ謀策、さりとて此まゝ夜に入れば屋敷の門限時刻に不審者とせむ謀策、名乗れば君  
 の愛犬を斬つて本國より追放せられしもの何故に入り込みしとの詮議に逢はむ、  
 もはや事こゝに至りて今更ら何とすべき、父が墳墓の沙汰も我身の運命も彼奴等が心の自由、  
 但し大泉周左衛門、もし叶はぬ最後に男一代いかなる振舞あるか、後の世の語り草に紀州家  
 の名物談柄を傳へてくれむぞと、また一入さらに胴骨を押据ゑて春の花見に取残されたるが  
 如き悠々寛々、

其三十九

一切さらに縁なき他家他門の屋敷ならば却て易けれど、父祖傳來の祿を食みし紀州家の江戸  
 屋敷、加之も追放せられし浪々の身が、なまなか親類の端くれに連なりし其奴の術に落ちて、  
 あるべき事か白晝に入口の戸を閉ぢられ過ぎ行く諸士に窓越の嘲弄せられし大泉周左衛門、  
 あはれや可憐ら逸物の捨時、もはや武運の末なり、  
 まして斯くなりし不覺の源因は、子として父の墳墓を守らむがための我、道を以て欺かれし  
 かと思へば猶更の無念、夜盜に寢首を搔かるゝよりも心外なり、心急くまゝ今日の朝飯も食  
 はず、閉ぢ籠められしまゝ晝飯も食はず、はや窓より斜めに射込む夕陽の影、同じ勤番住居の  
 兩隣家に人はあれど、今更ら壁越に聲高く我名を名乗らば恥辱の上の恥辱を重ねるのみか、  
 いづれ同腹の奴等なればこそ今朝よりの不知顔、たとひ啼音の哀を乞へばとて耳に入るべき

仍 如 件

苦なしと、そのまゝ観念の胸を据ゑて暮れ行く家内の薄闇に只一人、  
 江戸見物の途中、おもはぬ不意に捕はれて囚獄に投込まれし宥観を、世に落ち果てし災禍の  
 底と思ひの外、また思はぬ不意の飯尾作左衛門が當の奉行として餘所ながらの情あり、かつは  
 兼てより根來の頼覺房が兄と聞き及ぶ不思議の縁の高田左門と親しき體を見れば、その宥観  
 に却て浮ぶ瀬もあれ、この周左衛門こそは正しく四方を取圍まれて遁れ難き災禍の底、さて  
 も前夜まで彼が行方を尋ねし我また此後の彼に我行方を尋ねられむ、加之も前後うち揃うて  
 斯る不運の二人に隨從ひつゝ、生れ故郷を離れし東の空に六尺の大男が小兒の如き哀れさ、思  
 へば無縁の他人の以上三人、そもくゝいかなる因縁あつて斯くなりしかと、流星の武夫も人  
 知れぬ黒闇に男泣の涙一滴、  
 折しも窓越に軒下の闇を破つて、ぱつと照す提灯の火影、周左衛門おもはず闇中より眼を注

けば、やがて入口の外に三四人の足音、されど戸は開けず聲のみ高し、  
 「委細は存せぬ事、たゞ我等は確と返答のみを承りにまるつた、この家内に居らるゝ浪人  
 殿に當家重役よりの御用、神妙に出らるゝならば其まゝ案内いたさう、但し異存あらば主  
 人の歸るまで其處に其まゝ待たれい」  
 すはこそ野狐奴が正體を現はし來れりと、周左衛門、逆立つ憤怒の眉に闇をも貫く眼力を光  
 らせながら、入口に向うて胴骨より絞り出すが如き中音の太聲、加之も騒がず淀まず飽くま  
 で落著いたる言葉の端に冷かなる、微笑を浮べぬ、  
 「委細を御存じなき提灯の口上使者に此方も無用の委細は申さぬ、どこへ狼狽へて遁失せた  
 やら穴の知れざる主人の歸宅を待たうよりは、身に取つて僥倖の事、何の御用かは知らず  
 御當家の重役衆へ罷り出まするぞ、見苦しき浪々ながら兼て禮服一著は持參のもの、また御



案内の途中、もし我等が腰の業物お氣にかゝらば暫時お預け申さうか、兎も角も其の入口の戸を開けさッしやい」

其四十

晝は大立關を預かる諸士の交代所、夜は内立關を守る當番の宿直所、その一室に導かれたる大泉周左衛門、流石に追放せられし舊臣の身とて、丸腰のまゝながら、用意の麻上下を著けて悠々と坐せし體、まばゆき燭臺の反射に面も觸らず、我影に控へし五六人を何のためとも見返らず、袴の膝を割り胴を据ゑ首骨を兩肩の間に立て、動かぬ面魂どこまでも落著いたり、正面の襖を開いて立出でしは重役の一人、四十八九の嚴めしき出頭面、今しも殿中の君前より下り來りしまゝの體、じろりと周左衛門を見るや否、

「や、これは儲、誰かと存じたに大泉殿の子息ぢや」

みれば父が在世の頃、普請奉行の下に算盤球を弾いた百石取の勘定方と聞き及びし男、さては其後、自己が運まで弾き出して今この江戸詰に重役の一人かと、周左衛門、おもはず冷笑を浮べながら見上げぬ、

「大泉周左衛門と御存じなくて、こゝに召されましたか」

「いかにも、たゞ浪人風體の者が主人不在の家に今朝よりと、のみ聞き及んでの不審なれど、甚之丞殿と同姓縁者の間柄は江戸詰の若輩衆が知らぬ事、こりや其筈ぢや、はゝゝゝさて其後は誰いふとない風聞、大阪邊と存じたに、いつごろ當地へまゐられた」

「切腹、仰せ付けらるべき筈のところ格別の御慈悲を以て追放との御申し渡し、それを大泉家最後の御恩と心得、有難く頭に戴いて其まゝの足を東へ向けました、また今更ながら、父子ともに御承知の不所存者、わけて萬事當世の人氣取には不得手の拙者、かくなるべき

仍 如 件

管と存じまするぢや、は、ハ、ハ、ハ、

『その述懐は我等これで承つても詮ない事、たゞ今日、甚之丞殿方へ何の用事あつて來られたか、たとひ一門の縁者にせよ、私事の内談にせよ、お當お屋敷には其後の憚りあるべき筈の身、それが主人不在とて終日、悠然として居られたは如何なる義で、いかやうの仔細で、以前は兎も角、あらためて返答せられい』

俄に威容を作りながら言葉の端より聲まで打つて變へて詰れば、周左衛門さらに目色も動かさず、いよく悠々たる體、

『仰せまでなく、其後の憚りあるべき身なればこそ、終日、當年こゝに二十八の男が三歳兒の如く入口の戸を閉ぢられたま、神妙に罷り在りました、また甚之丞方へば前夜、途中ながら約束あつて、わざ／＼まるツたもの、さるを彼、その約束を反故として、否、かう

致すべき兼ての謀計でがな、この周左衛門を置去にして、いづれへ消えさせたやら、遁け出したやら、は、ハ、ハ、ハ、かやうな水の泡沫に似た奴は儲置き、幸ひ召されましたる貴方様へ伺ひたき一義、承れば本國に残し置きました亡父の墓碑が、御目觸のよしにて近々、御取退け遊ばさるゝとの事、こりや拙者の耳違ひかとは存じますれど、念のため』

『さては其義に就いて内々、同苗の許へ來られたぢやな、いかにも心中お察し申して笑止千萬、氣の毒ながら致し方のない事、全く耳違ひでは御坐らぬぞ』

きくや否、周左衛門、ぬツと膝を進めて耀く眼光に睨み返しぬ、

『まさか到大國を知ろし召す君侯の御意とも存せぬ事、じたい何者が口を開きましたか、その姓名を承りたい』

其四十一

仍 如 件

身は既に追放せられし浪人の取扱、その前には當時の羽を伸ばす出頭の重役、その背後には事の萬一に備へし血氣の壯士六七人、加之も五體に寸鐵を帯びざる丸腰の周左衛門、いは敵の重圍に落込みながら、不敵の眼中さらに何物の恐るゝ體なし、

「重ねて申さずとも義ながら、凡そ紀州一國に人間一個の骨を埋めし墳墓、どれほどの地所を塞いで何人の目觸りに相成りまするや、わけて父の墓は祖先以來の菩提寺、たとひ御馬前の忠死にあらずとも、武士道の端くれには漏れぬ筈の最後を遂げましたるもの、また兩成敗たるべき相手方の家は一子そのまゝ無事に相續いたして今なほ全盛と承るに、死後十餘年の父のみ何がため白骨まで發かれまするや、固より君侯の御意とは存せられぬ事、そもく何者の口切か、その姓名是非に承りたい」

「や、以前を思へばこそ無用の會釋も致す現在の今、浪人の身として舌の過ぎた事、誰が口切にもせい、その沙汰に取極めた以上、その沙汰ぢや」

「現在の今、浪人なればこそ、もし以前の身ならば斯くまで頭を下けて言葉は盡さずともの大泉周左衛門」

「黙れ、まだ浪人の取扱ひは情のうち、あらためて言はゞ追放に處せられた刑餘の身として、當家の沙汰に不足がましい申分、そのまゝには差置かぬぞ」

「いづれ此まゝに差置かれぬ義は固よりの覺悟、その段は如何やうとも思召の御勝手次第、但し父の墳墓は思召の御勝手次第とも成りませぬ事、こりや子としての拙者、かく御不足を申し上げるばかりでない、恐れながら正しく御政道の瑕瑾、いかに天下の御三家とは申せ、あまりの御沙汰」

「何、御政道の瑕瑾とは、じたい其方、正氣で申したか」

仍 如 件

「御念に及ばず、たとひ鐵火を頭上に浴びるとも狼狽へぬ筈の男、時に恐れ人に媚びて廻る鴉とは死すとも得いはぬ男、正しく御政道の瑕瑾を瑕瑾と申せば、此身そもく何となりまのする」

『もはや事の外ぢや、それ其奴に用心さッしやい』

聲もろとも背後に控へし六七人、忽ち前後左右を取圍めば、周左衛門、からくくと高く笑ひぬ、

『さてノ、入らざる御用心、この周左衛門を無用の下司活動するものと見られたか、事の叶はぬ時は血迷うた暴れ死でもするものと見られたか、は、ムムととひ小人原の術に落ちて無念の最後を遂ぐるとも、これが我身の運命と思はゞ見苦しき狼藉の振舞などすべき男でない、されど、もし萬一この周左衛門が手足を動かさば五人六人の相手、何の御用心にな

るべき、いづれにしても入らざる事、はッはッはムム』

其四十二

泥に育ちし鰻鱈は錐に首を刺され庖丁に腹を割られながら猶かつ身を藻掻いて遁れ出でむとし、龍門に上るべき鯉は俎板に観念の鱗を展べて尾鳍を動かさず、魚王の鯛は死しても頭骨眼肉を貴人の配膳に供して珍重せらる、

人また叶はぬ運命の底に落ちし曉、小人は泣いて叫び、凡俗は狼狽へて狂ひ、匹夫は血迷うて喚き、ものゝ覺悟なき小勇者は無用の手足を働かせ、まことの大勇者は睡るが如く平然として終る、

緑葉の蔭深き夏の梢、いつしか空に見え透いて、はや軒端に音なき秋風、そよと吹き渡る寶永六年九月十三日、紀州家の江戸屋敷に行末の名物と唄はるべき可憐ら武夫一人を捉へて、

仍 如 件

あはれ人しれぬ朝露一滴の最後に落し込みぬ、  
 その孝心に免じて父の墳墓の義は其まゝに差許し置く、但し追放に處せられし刑餘の身を以て恐れ氣もなく御政道に過言の者、これとて祖先傳來の家名を思召され格別の御取扱ひといふ嚴命の下に、大泉周左衛門、いよく切腹を仰せ付けられぬ、加之も生涯いづこにも立難き浪々の身が舊恩の君家に士分の最後を賜はるぞ、武夫冥利、有難く謹んで頂戴せよとの事、もはや理も非もなし、事こゝに至りては道もなし法もなし、水は逆しまに流れて人は横しまに歩む世の中、せめて父の墳墓を小人原の手に發かれざるが不思議の僥倖、また君寵の狂犬を斬りし其仇と言ひ渡されざるが案外の面目、今この我こゝに二十八歳の曉を斯かる無道の犠牲となるも天なり命なり、怨むほどの奴なし慣るほどの相手なし、絞り出すべき涙もなしと、たゞ眼を閉ぢて時刻の來るを待ち受けぬ、

されど我を足と頼みし宥観の身の上、また我を主と頼みし勘治平が身の上、いかに三人かくまで不運の縁を結びしか、その一人は獄中に繋かれて我こゝに死すとも知らず、その一人は浪宅に首を伸はして歸らぬ我を待つかと思へば、流石に觀念を据ゑながら腸を斷たるゝ心地、士分の最後を賜はるとは只これ切腹の替言葉、其まゝに浪人分の待遇、いづれ後は取潰すべき空長屋一軒を掃き清めて、新らしき疊一枚を敷かれたるのみ、作法の三方臺もなく白衣の死装束もなく、麻の上下を召上げられて著たるまゝの衣服、刀は我腰に横へしまゝの脇差、式を守る檢死の役人にはあらで見物の奴等十餘人、長屋の前後には警固の足輕二十人、たゞ大道の路傍に坐して腹を切らぬといふばかりの體、周左衛門、おもはず物凄き眼を光らして四方を睨み廻しぬ、

「大泉周左衛門、まことの男なればこそ紀州家の幸福、第一は眼前に控へさッしやる面々の

生命拾ひぢや、また名士の最後は名玉の碎かるゝと同じ事、いざ近う這ひ寄つて拜まれい」  
惜しや三十の曉に二年を餘して、落花は再び梢に咲かず、たゞ見事に腹十文字、

其四十三

山を去り世に出でて我兄とも頼みし大泉周左衛門が二十八の曉、小人原の術に落ちて紀州家の空長屋にて腹十文字の最後を遂げしとは知らず、身は學文路宿の捨子と聞けるのみ東國武士某一子といふ、その某を現在の町奉行飯尾豊後守とは知らず、たゞ思はぬ不意の囚獄に投込まれし宥観、七日目また俄に呼出されぬ、今日こそは死活の境、我運命の生滅、いづれになるかと思ひながら、獄卒に曳出されて白洲の砂利に押据ゑられ、いつしか生え伸びし毬栗頭の額越に見上ぐれば左右の席に順を守りて居並ぶ調べ方の役人、その正面より飯尾豊後守、肩衣の襟を正せし兩手そのまゝ袴の膝に置きつゝ、暫時の無言、じつと見下しぬ、

「もと高野山明王院の新發意宥観、當時は淺草田原町大泉周左衛門浪宅の厄介者、今日を以て許し遣はずぞ、もはや吟味ないぞ、起てい」

きくや否、宥観、はツと思はず頭を上ぐれば、飯尾豊後守、はや既に座を離れて奥の方へ入らむとする後姿、宥観また思はず頭を垂れぬ、

豊後守の入りし後、下役の一人、さらに宥観を近く呼び出しぬ、

「其方が今度の事、たゞ一應は輕う見えても内實、なか／＼以て後始末に手重い義があるぞ、さるを御奉行、ちき／＼斯く即決いたさるゝは例にない格別の思召ぢや、有難く存せよ」

「は、わけて斯やうな御沙汰向には猶更ら不案内の宥観、たゞ偏に御宥免のほど有難く心得まする」

「もはや其方の身勝手ながら、もし疲勞いたせば暫時休息を與へた上、醫藥の手當も取らす

ぞ」

「途中より不意に、なくなりましたまゝ七日目、さぞ宿許の主人も待ち兼ね居らうかと存じ  
ますれば、一時も早く」

「市中不馴れの者、願へば送り届けて遣はすぞ」

「いや、そのお言葉だけを戴きまして、このまゝの御放免を願ひまする」

「さらば起ちませい」

「はッ」

千年の靈跡を保てる高野山の極樂に我ための地獄あり、古來幾何の人命を断ちし囚獄の地獄  
に我ための極樂あり、うき世の利害得失、人間の窮達消長、いづこに運命の定めあるべき、  
夢の如く幻の如し、

奉行所の裏門より送り出されて、籠の鳥の雲井に放たれし心地、東西の方角も確とは見定め  
ず、そのまゝ堀際に身を縮めて走せ行かむとすれば、折しも其處に立てる編笠の武士一人、

「こりや待て還俗坊」

其四十四

おもはぬ不意に捕はれて囚獄の闇に繋がれしが、また思はぬ不意に許され、浮世の風に放た  
れし宥観、散るが如く身を飛ばして其まゝ走せ去らむとする背後より、こりや待て還俗坊と  
の聲、はッと見返れば編笠に面を包みし巻羽織の武士一人、片手を宙に軽く浮べて差招きぬ、  
恐ろしき禍災の餌食となりつゝ、その肩に舐められ其舌に弄はれしが、やうく牙を免れて七  
日目に吐き出されし今、また囚獄の堀際に駈け放れぬ背後より正體の得知れぬ編笠武士に呼  
止められ、さらぬも疲れ果てし五體、おもはず脚下の縮む心地しながら、臆魂は生れついて

仍 如 件

の不敵さ、靜に小腰を屈めて近寄りぬ、加之も額越の兩眼、じろりと笠のうちを差覗きぬ、

「お呼止は何の御用」

武士は編笠越に四邊を見廻しながら、わざと身を摺り寄せて聲を潜めぬ、

「幸ひ獄中は免れても、うかく油斷すな、また歸る途中いかなる變に出逢ふやら、いはゞ執念深い浮世の外、大敵を持つた身ぢや、危いぞ」

「や、何と仰せられまする」

「元は高野山の新發意、宥観と呼ばれたものであらう」

「は」

「今は淺草の田原町に、大泉某といふ紀州家の浪人に養はれ居る身であらう」

「それまで委細に御存じの御方、いづれ様であらせられまする」

「ちと仔細あつて、よく知つた者ぢや、但し其身に取つて恐しうない者ぢや、兎も角も我屋敷まで、田原町の浪宅へは別に人を遣はさうぞ」

「は、さほどまでの御意に重ねて、恐れながら、この江戸には一切の所縁なきもの、田舎生育安堵のため、御姓名を伺ひまする」

「姓名、聞かせても始めての事、知らう筈あるまいが、屋敷は神田の小川町、高田左門といふ直參武士ぢや」

きくや否、宥観おもはず目を圓くして首を差伸べながら、またもや笠の中を覗ふが如く覗き込み、

「もし同じ御身分、同じ御姓名の方、番町にもあらせられますか」

不意に驚く武士、また思はず笠に手をかけて宥観を見下しぬ、



「その高田左門、何として知る、近ごろ番町より小川町へ引移った者ぢや」

「紀州の根來に頼覺坊と申さるゝ御舎弟を持たれまするか」

「や、頼覺いかにも弟、それまた何として知る」

「お供、此まゝ御屋敷まで、たゞお供いたしまする」

「こりや不思議、委細は後ぢや、あの辻に駕を待たせて置いたぞ、急げ」

「はッ、はッ」

其四十五

兼て知る宥観が放免の時刻を囚獄の裏門に待ち受け、用意の辻駕に乗せて自己の駕もろとも、飛ぶが如くに小川町の屋敷へ立歸りし高田左門、そつと奥の一室に呼入れながら語れば語るほど思はぬ由縁の糸に引合せて、聞けば聞くほど不思議の縁の搦み合に今更の小膝を打ちぬ、

「神ならぬ身とは、よくいうた世の諺、かうまでの重ね合つた縁とは知らいでや、儲も不思議ぢや」

「その不思議に付きまして、父が事、只今御存じのやうに仰せられました東國武士の某私のために學文路宿の捨親、いづこに何と申して、暮し居りまするか、十六の今日まで、この世の中に、親は無いものと心得て、あきらめてたゞ捨子のまゝに育ちました身、わけて戀しう、なつかしう存じまする」

宥観、おもはず兩眼の溜涙、ほろ／＼と膝に落せば、高田左門も俄に顔を反けて聲を潤ましぬ、

「さもあらう筈、なれど今、暫時の間は只この高田左門が餘所ながら、その捨親を知るといふだけの事で得心せい、これも其親のため、また其身のためぢや、但し下司の種ではない

仍 如 件

ぞ、東國武士の某も某、正しく歴とした何の某、時機を見て逢はずぞよ、まづそれまでは知らぬ昔、きかぬ昔と思つて居よ」

「は」

「その捨親に餘所ながら頼まれたばかりか、きけば案外、また我肉身の弟、あの頼覺房にもさほどの因縁あるものとは、いよく以て重ねぐの事」

「佛界にも在家にも、かやうに立寄る木蔭の薄い身、たゞ此後の御力、偏に頼み上げまする」  
「心得た、及ばすながら高田左門、めでたう父子の對面さすまでは其、その捨親になり代つて萬事の介抱するぞ」

「は」

「但し、相手が高野一山の執著、不意の横飛沫に吹き暴れて、關東の總別當たる此江戸の白金

まで手を伸ばした上は、たとひ一旦、町奉行の吟味を免れても油断のならぬ大敵ぢや、さるを大泉周左衛門とやら、どれほどの分別ある人かは知らず、御三方を追放せられた浪々といへば世間に向うて埋木の身、萬一の盾には覺束ないぞ、まして高野山は古來別格の地頭分にもせよ國は紀州家の配下同然、猶更ら以ての事、立寄る大木の下でなくとも幸ひ天下の直參と呼べる、高田左門は田原町の浪宅よりも聊か手丈夫の筈、せめて半年か一年の間、そつと敵の汐合も見定め、また其頭が生え伸びて結髪の男になるまで」

「かすくの思召、身に餘つて、生涯の御恩と心得まする、つきましては猶更ら一時も早う、田原町の浪宅へ、この義を」

「いや、念に及ばず先刻、はや人を遣はして事の大略を知らせ置いた、今にも大泉とやら來へき筈、その上また委しう語らうぞ」

「は」

『さて僅の間ながら不意の獄中に嘸、身の勞疲もあらう、始めての他人と思はず萬事うち寛いで、食事も沐浴も心次第ぢやが、まづ五體を横にして、は、は、は、いかやうな無理でも聞くぞよ、こりや昔の夢に捨てた父の義理名代ぢや、は、は、は』

其四十六

たとひ一時の惡戯にもせよ、千古清淨の靈跡に七日屁溜の糞を積み上げて一山を驚かしたる宥觀、よしや師の恩に引かれ頼覺房が助力あるにせよ、抛け殺さるべき最勝會の相撲に蝗の如く飛び出して六尺の大敵を蹴倒したる宥觀、また思はぬ不意に召捕られし獄中に繋がれても、免れの運命の末かくと思へば觀念の胴骨を据ゑて神色自若たりしほどの宥觀、されど身は鐵石にあらず、今年やうく十六の還俗坊主、加之も始めて浮世に這ひ出せし首途

の禍難、生來いまだ耳目に觸れざる放火夜盜の惡漢無頼に肩を押詰められ膝を組み敷かれて、我しらす五體の疲勞ありし上、また思はぬ高田左門が不思議の縁の情に心弛みしのみか、奥深き閑室に自己たゞ一人、四邊に人なく臥房を設けられて薄闇き屏風のうちに身を横たへつゝ、ほつと打寛いで此ほどより胸に蟻りし大息を吹けば、何とやら皮肉の解けし心地、いつしか自然に氣は煙の消え行くが如く、茫として夢うつゝに睡り入りぬ、石佛を横に倒せし體ながら、たゞ鼯の聲に死人とも見えざりし宥觀、ふと我にかへりて目を見開けば、今しも睡りしとのみ思ひの外、はや半日を夢中に過して夜に入りし我枕頭へ、屏風の小蔭より燈火の餘光ほつと漏れ來りぬ、さては疲れ果て、平生の我を失うたり、加之も始めて逢ひし情の宿に、わけて田原町の浪宅より走せ來る筈の人を待つ身が、かく前後を打忘れて濟むべきかと、おもはず首を擡けつゝ靜

仍 如 件

五四一

に見廻せば、折しも隔室の襖を細目に開けて差覗く人影、

「けふは晝も夜もないと思うたに、はや目が覺めたか」

入り來りしは主人の高田左門、宥観それと見るや否、起き直ッて俄に容を正しぬ、

「無作法もの、うかと我しらず、かやうな體を御覽に入れました」

「いや、氣心の確なればこそ、もし弱くば、五體を損じて病み煩ふ筈のところ、さるを僅半

日の一睡に取返した其、その顔色、いかにも自然の逸物ぢや」

「これは、只、幼少より山の頂を獸のやうに馳せ廻ッて、寺門の惡戯者に育ちました身の一

徳、いはゞ浮世の外で十六年、我まゝの出養生いたしましたも同じ事、はゝゝゝゝ」

「おもしろい、はゝゝゝとの一言は面白いが俵、あの田原町の浪宅に、ちと面白からぬ事のあるやうぢや」

「や、そりや如何やうな義で」

「先刻、人を遣はした使者と共に勘治平とやら留守居の下郎が馳せ參ッて居る、委細は其も

のより、但し我等きくところは大泉周左衛門、三日以前、紀州家へ出向いたまゝとの事、

追放に處せられた身が三日そのまゝ其屋敷に居らう筈なし、また無事ならば歸るべき筈、

歸らずば音便あるべき筈、こりや尋常事でないぞ、兎も角も勘治平これへ呼び入れて、な

ほ委しう聞いた上の事、始めての我等へは遠慮もあらう」

眉うち擧めて語りながら、振り返りて俄に手を鳴らせば、宥観おもはず死毒を舐めし如き面

に目鼻を寄せつゝ、的なき天井の片隅を苦しげに睨みあけぬ、

其四十七

身は六尺を越えて山門の荒仁王に等しく、力は十人に餘りて世間いづこの里にも敵なけれど、

仍 如 件

都みやこの空そらに遠とほき紀州きしゅうの果はての片田かたの舎なに育そだちし勘治平かんぢへい、その名倉村なぐらむらに性質しやうせつの心こころより自己おのが正直しやうぢきを差引ひけば、あはれや残のこる浮世うきよの分別ぶんべつに足たらぬ勝かちの男おとこ、主人しゆじんの高田左門たかださもんに呼よび入れられて、宥観ゆうかんの顔かほを見るみるや否いな、はや胸むねに迫せまりて物ものも得えいはぬ盤ばん大面たいめんに兩眼りやうがんの涙なみだ、

宥観ゆうかんまた我われを忘わすれし小膝こひざを進すすめて、おもはず握にぎり固かためし拳こぶしを迂すべらしながら、待まちち兼ねかし首くびを差出さしだしぬ、

「この身みが不意ふいに召捕めしとられた災難さいなん、今日けふまた不意ふいに許ゆるされた上うへ、かやうに御當家ごたうけに引取ひきとられた仔細しじゆ、それは委くはしう後あとで語かたらうが儲たく、大泉殿おほいづみどの、三日みか以前いぜん、紀州家きしゅうけの屋敷やしきへ行いかれたまゝとの事こと、じたい何なんのために行ゆかれたか、せめて行ゆかるゝ時とき、餘所よそながら言いひ置おかれた義ぎはないか、ふしぎの御縁ごえんで行末ゆきすえの御力添ごりからせを下くださるゝ御當家ごたうけちや、御免ごめんを蒙かつて萬事ばんじありのまゝ、知るだけしるだけの事ことうちあけて」

たゝみかけて問とはるゝ言葉ことばに勘治平かんぢへい、猶更なほまさら六尺むくたひの大兵たいひやうを小兒こごの如ごとく居縮ゐすくめながら、差俯さしうついての濕うるみ聲こゑ、

「何なんの御用ごようとも仰おほせられず、たゞ四日よっか以前いぜんの夜よに入いつて後のち、いづれよりか歸かへられて、やれ宥観ゆうかんの行方ゆくへが案外あんぐわいの異ことな事ことから知しれたぞ、まづ一安心ひとあんしんとの御言葉ごことば、儲たくその曉方あけがた、加しか之もも食事じきじさへなされず、そのまゝの無言むごんに凡おほそ一町ひとつちやうばかりも出でられたかと思おもへば、ふと立歸たとかへられて、こりや勘治平かんぢへい、紀州家きしゅうけに居ゐる親類しんるいの端はしで、同苗甚之丞どうぼうしんじやうといふ者ものの方かたへ行ゆくぞとの御一言ごごん、その外ほかに言いひ置おかれた事ことも、また御音信ごおとよしんもない三日みか以來いらい、あの浪宅なうたくで、この大男奴おほをとこめたゞ一人ひとり、何なんとして居ゐられまする、幸さいひ今戸橋いまどしの庄五郎しやうごろうとて江戸えどの市中まちなかで男家業おとこけいごの伊達者いたてしやとやら、これも最初はじめは貴方あなたの行方ゆくへを探さがさうため、その名なを聞き及およんで頼たのみました折柄せりがら、また驅かけ込こんで泣なき付ついたものゝ儲たく、御三家方ごさんけがただけは我等われらの手ても足あしも届とかないとの事こと」

ことし十六の身ながら、かくと聞きし今は却つて五體の骨節を臆魂に繋ぎ合せし如き宥観、さらに顔色も變へず、たゞ靜に無言のまゝ勘治平の方へ首肯きつゝ、あらためて主人の高田左門へ問ひぬ、

『只今この者が申しまするだけの次第、また聞くだけの外には、何の思案も工夫も及びませぬ身、たゞ只管思召のほどを伺ひまする、周左衛門こと、同苗甚之丞方への私用は兎も角も、およそ御三家方には一旦、追放したものを見付けし砌、如何やうの御取扱に相成りまするやら』

高田左門、おもはず組みし腕を解いて、暫し小首を傾けぬ、

『む、四日前の夜、案外の異な事から宥観の行方が知れたと申したな、その上まづ一安心と申したな、む、四日以前の夜いかにも、こりや案外の異な事でもせうが儲その曉方、紀

州家へ出向いたまゝ三日以來、はてな、勿論、天下の御三家といへば萬事の格合、なみくの大名衆と違つて其時その場の成行次第、いかな不意の扱ひせらるゝかは知らず、親類の同苗方へ一身の私用で忍び参つたもの、よし重役の目に付いても言葉さへ交さずば知らぬ分で濟む筈の例、加之も本國で追放の身を、わざ／＼この江戸屋敷で事あたらしく召捕るほどの儀は、なれど其まゝ歸らぬが不審の第一、わけて同苗甚之丞といふものゝ方より何か内通のあるべきが、今日まで絶えて其まゝとは、あまりの奇怪』

其四十八

主人も宥観も其後の口には言はず、たゞ眉を擧めて心に不安の念を抱けば、勘治平、そつと、額越に雙方の顔色を窺うて猶更ら打怖れぬ、

紀州家の上屋敷、重役の方に御意得たしとて、わざと只一僕を召連れたる手輕の身ながら、高

田左門、わけて慇懃の會釋中に陪臣ならざる格式を立て、すつと眞正面より申込みぬ。  
 天下三家の知行高より見れば馬草料にも足らぬ僅の二千石なれど、同じ天下の直參衆といへば我まゝの家風に吹き落されぬ筈の客分、書院の間に導いて給仕の諸士に茶菓を運ばせしやがて立出でしは此奴、ふしぎにも大泉周左衛門を無理往生の詰腹させし近來の出頭人、互に初對面の挨拶も濟みし後、高田左門肩衣の襟もろとも袴の折目を正しながら流石は事に馴れし老功、言葉は却て圓く滑かに微笑を含みぬ、  
 「實は内々、そつと伺ひたき私事のため、この邊を御含みの上、身勝手ながら、ひらに打解けての御對談」

「これは御挨拶、さて御用の義は」

「御當家、御家來衆のうち大泉甚之丞と申さるゝ御人、あられまするか」

「いかにも、その大泉甚之丞、まかり居りまする」

「その大泉殿方へ三日以前、元來こりや親類のよし、同苗周左衛門といふものが參つたまゝ、いまだ浪宅へ立歸らぬとの事に付きました」

「や、左様の義は萬々ない筈のもの、その大泉周左衛門、もと甚之丞と同じ當家の御家來筋なれど、罪あつて本國を追放せられたまゝ、當時いづれに忍び居るか、とんと其後の事は、第一また當屋敷内に一夜たりとも他よりの宿泊無用の掟」

「たしかに、さうと聞き及んで、わざと甚之丞殿方へは向はず、不意の推參ながら斯く重役の筋へ伺うた甲斐もなう、さてさて無念千萬」

「異な御言葉、御無念とは其、その周左衛門に、いかやうの御用はしありましてか」

「御人品を見掛けて打明けまするぞ、我等ちと其、周左衛門に面目の立たざる意恨あつて、日

仍 如 件

夜、頻りと探しまはる折柄、勿論、元は御當家の御家來衆とは存じながら、只今では召放されの浪人者、おのれ見付次第と心得まして」  
語りながら高田左門、じろりと偷み目に見れば、果して心に覺えありけの顔色、何とやら思案の後、そつと膝を進めぬ、

「この不肖な手前どもへ歴々の御直參として、そこまで打明けらるゝ御言葉に對し、内々ながら漏らしますれば、その周左衛門、いかにも當屋敷の同苗甚之丞方へ三日以前」

「むゝ忍び居りまするか」

「いや、實は甚之丞、ふと途中にて出逢うたを幸ひ、兼て重役どもよりの申付け縁類の好意に呼び寄せた上、空長屋に押込めて、詰腹きらせました」

「南無三、死なしたかつ」

「御心外とは存じまするが、當家に於ても彼は只、本國追放のまゝには差置けぬもの、其後の義に付いて居所詮議の折柄、幸ひ捕へての始末で」

「もと御當家のもので、加之も猶更ら追放の後に差許せぬ義とあれば、身勝手の我等が一分で打果さうよりは、彼奴本人に取つての死場所ながら、じたい如何やうの次第で詰腹となりましたか、せめての念晴しに事の大略を」

自己まづ敵の懐中に入りて、我手に打漏せし如き無念の顔色を現はしながら、高田左門こゝぞと問ひ詰めぬ、

其四十九

敵の聲を聞かむとすれば敵の影に立添へとの諺、高田左門、おのれ大泉周左衛門に人しれぬ怨恨あつて追込みしが如く、紀州家の重役が口より内々そつと詰腹の仔細を聞き出しぬ、

仍 如 件



その父は武士道の意地に馳せ過ぎて相傳の食祿を削られ、その身は君寵の狂犬を斬つて故郷の家門を追はれ、加之も紀見峠の俠骨に勘治平を説伏せし事、三日市の宿に只一夜の友ながら十年の知己に等しく我弟の頼覺房と語りし事まで、委細に宥観より聞き及ぶのみか、始めて逢ひし僅宵の一刻なれど多年その道に得たる飯尾豊後守も天晴れ男振と小膝を打ちて我に語りしほどの人品骨柄、わけて無理往生の詰腹さらせし紀州家の重役さへ舌を巻いて其最後の不敵さに驚きし事を思へば、行末の花も咲かさず可憐ら二十八を一期の嵐に散りし周左衛門、いかに其身の不運を觀念せしかと、一目も見ざる高田左門いと猶更ら玉を碎きし心地して、おもはず涙を浮べぬ、

まして元來これほどの武夫を、よしや其分に捨置き難き仔細ありとも、無残や平生は人も通はぬ鹿塚の空長屋に押込めて、いはゞ大道の路傍に等しき詰腹を切らせしとは、そもく天下三流の大家にあるまじき無法の沙汰、まして其口裏を聞けば卑怯にも欺いて落し坑に突き入れしが如き體、第一に言語道斷の曲者は同苗甚之丞といふ奴、おのれ親類縁者の端くれに身を置きながら、おもはぬ不意の途中に出逢ひし事、いはす語らずば其まゝ濟むべき筈の情を、わざく呼子笛の綱手となつて重役の出頭面に媚ひ詔ひしとは、此奴、埋み火に蒸し殺しても飽足らぬ人面の畜類ぞと、高田左門また一目も見ざる奴ながら、我が仇敵の心地して憤怒の齒を噛み鳴らしぬ、

きけば聞くほど當世無類の逸物、あたり武士を世に埋木のまゝ加之も犬猫に等しく空長屋の床板に殺せし紀州家の振舞、おもへば思ふほど残忍非道の曲物、おのれが同族一門の血肉を喰ひ取つて賞翫の舌鼓を打ちし甚之丞め、好機もあらば周左衛門への手向草に生面の皮を剥いでくれむ、また奥深き主人の殿には及ばずとも、せめて事に當りし紀州家の重役どもに一

仍 如 件

泡吹かしてくれむぞと、高田左門、人知れぬ無念の腰を絞って立歸りぬ、

されど以上の仔細うちあけて具さに語れば、今年やうく十六の還俗坊主ながら宥観の面魂、

逆も其まゝ無事の耳には入れ置かぬ筈、さりさりとて語らずば猶更らの勢ひ、たゞ紀州家の

同苗甚之丞と聞き及ぶ的を覗うて如何なる事を仕出來すやら知れぬものと、一室に呼入れつ

ゝ其顔色を窺ひながら周左衛門の最後を告げぬ、

かくと聞きし宥観、はつと思はず身を驚かして怨恨の眦を裂き拳を握るかと思れば、黙然と

して木像に等しく五體の端も動かさず、たゞ専念に差俯いて聲を濕ませながら、

『南無阿彌陀佛』

其五十

大泉周左衛門、あたらし名木の花も咲かで二十八の生涯、いよく紀州家の小人原に謀られて

人しれぬ空長屋に無念の最後を遂げしと聞くや否、宥観おもはず差俯いて一遍の念佛を唱へ

しのみ、その後は朝夕たゞ黙然として奥の一室に閉籠りながら、おのが獄中の疲勞も忘れ果

て、寐もやらぬ體、加之も夜更けて漏るゝ燈火の影より主人の高田左門そつと窺へば、寂寥

たる燈下に専念の容を正して無言の讀經、猶更ら哀れ深く物凄し、

宥観がための兄となり勘治平がために主となりし大泉周左衛門、いよく死せし後は、もは

や田原町の浪宅あのみまゝに置くべき用なし、加之も倒せし大木の後に残る芽生のあるのを知

れば紀州家より禍の斧、何時また不意に飛び來るやら、わけて高野一山の内意をうけし白金

の別當も思はぬ案外の出獄放免に不審の眉を顰めつゝ、猶更ら嫉妬執著の折柄、いづれにして

も油斷大敵なりと、高田左門腹心の家來を馳せて一夜のうちに其浪宅を取片付けぬ、

固より浮世を忍ぶ假の宿、まして日も淺き浪宅の託住居、江戸全盛の華奢を見習ふべき身な

仍 如 件

らねば、やうく三人に男世帯の鍋釜あるのみ、  
 されど周左衛門が著替を入れたる古葛籠の底に姫路革の大財布ありて、その口を開けば目を  
 射るばかりに光り輝く大判小判とりませて五百餘兩、別に油紙もて包める先祖傳來の系圖一  
 卷、藩祖南龍公より祖父が初陣の戦功に賜はりし感状もろとも黄金裝飾の七首一口、幾重の  
 奉書紙を揉み和らけて巻込みし亡父の位牌と亡母が形見の笄、平生その身に帯びし兩刀の折  
 紙、大は犬兼光、小は福岡一文字、  
 高田左門、いちく手に取上げて兩眼の涙を含みながら、世の諺にいふ名木の落葉とやら、  
 これぞ主なき死後に氏素性を物語るべき品々、中にも哀れ其身の生涯を埋木のまよと思へば  
 こそ、見苦しからぬ浪々の行末を保たむとて斯くまで人知れず金銀の用意せしは流石に覺悟  
 ある男、惜しや天晴れ逸物を狗鼠の餌食にして退けたりと、また今更の心地に泣きぬ、

以上の品々、以上の金子、偕これ誰に譲らむ家もなく妻子もなく、紀州家にあるべき一門  
 の縁者も、あの同苗甚之丞奴が非道を見通す上は其他いづれも同じ穴の奴原、わけて亡人の  
 心に叶ふまじ、さりとて宥観も勘治平も元は血筋の縁なき他人の身、逆も受くべき筈なし、  
 さらば先づ我菩提所へ石碑建立して追善供養の外は、一切これを我手に預かり置いて後日の  
 工夫、紀州家の重役どもに一泡吹かさむ時の用ありと 高田左門また人しれぬ閑室に腕を拱  
 いて思案の小首を捻りぬ、

『我も持ツたが病の男一貫、おのれやれ、この形見の品に何と物いはしてやらう』

其五十一

淺草田原町の浪宅を取片付けし後は、宥観もろとも勘治平も高田左門が情の宿に引取られて、  
 人しれず無念の涙を呑みながら、内々そつと紀州家の方角を睨みつゝ、また高野一山の執著

いかに白金の別當より吼え立つるかと窺ひぬ、  
一夜、奥の方に俄の客來ありと聞いて宥観は猶更ら一室に深く閉籠りながら、聲を潜めて勘  
治平との物語、

『武家に用のない十六の還俗坊主と、晴々しい座敷の上に不似合の大男が、かう二人とも、た  
ゞ手を束ねて御當家の厄介となるは心苦しい事、さて何とか身に應じた御用あるまいかな』  
『いや、まだ貴方様は世にいふ長袖に育った身、この後どのやうな御用に立たうも知れず、こ  
の勘治平こそ、草深い片田舎で三十二の今日まで丸裸の毛脛を飛ばして駆け育った奴、また  
何を見習うても元來の無器用もの、勿體ない只お情に預かるばかりで、逆も御恩の返せる身  
ではなし、第一は生涯お主と頼んだ行末の杖柱を失うて、もはや此江戸に何の希望も娛樂も  
ない身、あたら御當家の疊敷を塞いで穀潰しのまゝで終らうよりは、瓜の蔓は土氣を離れぬ

諺今のうち生れ故郷の空へ立歸つて、また元の水呑百姓が分相應の業かと存じまする』  
『や、さういへば此身も同じ事、生涯の兄とも思つた其人を俄の不意に取失うて、こゝも不  
思議の縁は縁ながら、本街道の木蔭を放れて岐路に雨宿りする心地、なれど、折角の思召  
を無にして此まゝ飛出しても、馴れぬ浮世に方角さへ知れぬ身が、さて何となるものぞ、  
まして何時、また何處から思はぬ禍の旋風に吹捲はるゝやら、油斷大敵の折柄ぢや』  
『そりや浮世の雨にも風にも規はるゝほどの利發に生れた貴方様の事、五體は世間の人並に  
勝れて居ても、倅これといふ時には結句あるより無いが優勝の勘治平、此まゝうろく狼狽  
へて、お足手纏ひにならうよりは、どうでも今のうち元の薬小屋へ歸りたう御坐りまする』  
『よくくの縁あればこそ、互に無縁の他人が今日こゝまで、この江戸の空まで伴うて來  
たものゝ、その縁を結び付けた元柱のない今更ら、歸るといふを引止める力のない身ぢや、

仍如件

但し一應は御當家の思召も聞いた上の事」

きけば無理ならねど流石に下郎は下郎、高が凡夫より外に取得のない男、なるほど此まゝ心の進まぬ江戸の空に引止めて無用の行末を見るよりも、今のうち送り歸して生れ故郷の片田舎に無事の老後を遂げしめむと、宥観おもはず首肯しながら、さて何とやら油に水の交りし心地折しも此方の襖を押開いて、當家の召使ひが慇懃の口上振、

「宥観様、そのまゝで宜しいとの事、主人より、お客席へ召しまする、いざ御案内」

其五十二

わけて其後は世間を憚りて、奥深き一室に忍ぶ身、また忍ばざるゝ身、さるを今、俄に主人より客席への案内、宥観おもはず眉を擧めながら導かれて書院座敷の此方より窺へば、燈火を中間に隔て、何とやら主客うち解けし懇談の體、

宥観その座に進み出でて、流石に幼少より剛れし寺門の生育、慇懃に禮を正しながら身の角も立たず頭を下けぬ、

「は、召しました宥観」

主人の高田左門、満面の微笑もろとも靜に振り返りての聲、

「これは別して我等が入魂の御人ぢや、此後また如何やうの御世話にならうも知れぬ、その心得で御挨拶せい」

主人の言葉に宥観、始めて頭をあけつゝ燈火の影を見れば、や、我ために地獄の生佛と思ひし町奉行その人、

「いづれ様かと存じましたに、は、その節の御恩、有難く御禮を申し上げます」  
飯尾豊後守、暫く無言のまゝ膝を向け直して宥観の顔、ジツと打守りながら、思はず聲は漏

仍 如 件

り勝なり、

「あの節の事は一切、公儀役目の上、こゝでは飯尾作左衛門といふ、當家の年久しい友達ちや、近う、會釋も遠慮も入らぬ事、近う寄つて、萬事、さ打解けて隔意なく語らうぞ」

「恐れ入りまする、宥観、身分の義は、あらためて申し上げずとも、御存じあらせらるゝ事、只今は、ふしぎの御縁で、かく御當家のお扶助を蒙り居りまする」

「その事は委しう、主人殿より聞いたぞ、さて人といふものは、どこに、いかなる縁のあらうものやら、猶この末、お頼み申すが身のためぢや」

「は」

「時に浅草田原町の宿許、その浪人衆も思はぬ無念の義で、亡き數に入られたとの事、重ねぐの不運に逢うて嘸、取残された身は猶更ら心細くもあらうが、これも定まる其人の運

命ならば致し方なく、詮方のない次第ぢや」

「兄とも、父とも、存じましたるもの、只お察しを願ひあけまする」

「いかにも、察し入る、但し其人の最後に就いての事、きけば紀州家に同苗甚之丞といふ者のあるよし、後日、もし其奴に出逢は、何とする、さらに包ます憚らず心體を申して見い」

「は、外ならぬ御兩所様の前、宥観、心體ありのまゝに申し上げますれば、其奴いつといふ限りのない自然の後日、もし出逢うた時との御言葉を、待ち遠く心得まする」

「むゝ時も待たず、おしかけて無念を霽らす氣か」

「こゝ三年のうちには必ず、兄と致した周左衛門の手向草に、其奴の根も葉も掘り返して掘り取りまする覺悟、後日、もし自然に出逢うた時の的は、恐れながら別段、また其外に」

「や、その的は」

仍 如 件

「もし萬一、ならば今生最後の大悪戯に兩の肩へ、天下の御三家その紀州様と千年の名跡あ  
の高野山を荷うて、一振、ふツて見たく存じまする」  
きくや否、主人も豊後守も思はず互の顔を見合せて、其まゝの目を等しく宥觀の面に注ぎぬ、

其五十五

主人の高田左門、ふと廁へ行く體に其まゝ其座を立去れば、あとに残りしは飯尾豊後守と宥  
觀との二人、  
うまれて二歳の曉、高野山の麓、學文路宿に捨てられし宥觀、その時の腰札に付けられし東  
國武士の某こそ眼前の飯尾豊後守、これが我父とも知らず、たゞ奉行所といひ今また此處に  
情の數々、言葉の端々、しみぐ何とやら身に染み渡りぬ、  
豊後守、たゞ默然として燈火の光を見詰めしが、いつしか兩眼の睫毛に含む涙の雫、流れて

頬に傳ふや否、俄に堪へ兼ねて振り返りぬ、

「こりや、汝は親に逢ひたいか」

宥觀、おもはず豊後守の面體、じツと打見上げぬ、

「何と、仰せられまする」

はや豊後守、聲まで濡れて濕りぬ、

「鳥獸さへ親子抱き合ふ情愛の中に、人間の親として、自己が生んだ子を、やうく二歳の  
乳呑兒を知らぬ他國の山里に捨てるほどの、その無慈悲な父でも、今もし無事に居れば、  
逢ひたく思ふか」

宥觀、我を忘れて摺り寄る膝、

「捨てられても、子で御坐りまする、捨てゝも親で御坐りまする、もし、萬一もし無事に居

仍 如 件

らるゝならば宥観、宥観の父に相違、御坐りませぬ、その父、逢ひたく思ひまする」

豊後守、おもはず宥観の両手、しかと握りて引寄せぬ、

「こりや、よく見い、その、その父は、我ぢや」

宥観、とられし両手に心もなく、たゞ豊後守の顔、茫として打守りながらの一聲、

「父、父上ッ」

「よく、よく十六の今日まで、怪我もなく育ツた」

「宥観、母上は御坐りまするか」

「許せよ、その母は、母は汝を生んだ時、産後の病氣で」

「お名は、何と申しまする、お年は、お生家は」

「それ、この父に言はしてくるな、當家の主人が委しく知る筈ぢや」

「されば母上の事、措きまして、御不足を申し上げるではなけれど、父上ほどの御身分が、

何のため、宥観を、捨子になされました」

「昔の夢、それも萬事、當家の主人に聞いてくれよ、たゞ汝の父ぢや、汝は我子ぢやぞ、なれ

ど今、暫時は此まゝ、當家に預けて置かねばならぬ仔細ある、それまでの間、人には言ふ

な、互の身のためぢや」

其五十六

うまれて十六の今日まで、東國武士某一子といふ七字の外、たゞ高野山の麓、學文路の宿の  
朝露に消えざりしを果敢なき身の幸福として、父は如何なる人やら、母は何處の何者やら夢  
にも通はねば年にも似ざる寢覺勝の枕を敬て、人しれぬ涙の春秋、わけて山を追はれ世に出  
でし甲斐もなく、行末の生涯を頼みし其人には死に別れ、ふしぎの縁の情の宿に引取られなが



ら影さへ薄く忍ぶ身は猶更ら心淋しき此ごろの憂節に、おもひきや今ぞ始めて我血をうけし生みの親に逢はむとは、

夢か、うつゝか、否、これぞ正しく我父と、見上ぐる兩眼の涙、ほろ／＼と滾しながら三歳兒の如く抱付けば、天下の決斷所に腫を据ゑて一言の下に黑白上正を喝破する飯尾豊後守も今は只これ恩愛の情に丸潰れの盲目阿爺、男泣の聲を呑んで總身の力に宥観を抱き占めぬ、『親はなくとも子は育つ謬、十六年の間、よく無事に居った、何事も昔の夢ぢや、捨てた罪は許せよ、さる代りには此父、汝を産んで死んだ母への申譯、今は別に屋敷の妻子ありとも、汝のためには一身を賭けて護るぞよ』

『勿體ない事、たゞ父ぢや、汝は我子ぢやぞと、仰せられました其、その御一言で亡き同上も嘘、この宥観も有難く、得心いたしまする、いづれ只今の御身分、お屋敷に、別の母様

も、また見ぬ同胞のあらう筈と存じて居りまする、なれど父上、この宥観を子と思召さば、あらためて、せめて、父上より名を、宥観とは學文路宿の捨子を拾はれました山上得度の法名、還俗の名を、願ひまする』

『やれ、いじらしい事いふぞ、不惑な奴ぢや』

『父子、めぐり逢ひました證據に、今、只今、後と仰せられず、この手を放さぬうち、名を下さりませ』

『さて／＼、どこまで不運に生れ居ったか正しく汝こそ、我飯尾家の嫡子ぢやに、や、あはれな事して退けたぞ』

『子を捨てる御身分でない昔に、捨てられました身、さら／＼御家門の嫡子とは存じませぬたゞ父上の口より相違ない種の實に、名を下さりませ』

仍 如 件

「む、其一言で昔の我過失もない飯尾家の無事満足、よく言うてくれた、なれど、それほど事を分けての分別あるもの、汝に遠慮あるだけ猶更ら以て父に行末の如才ないぞ、如何にも父子對面の證據ちや思案に及ばぬ、この父が幼名そのまゝ」

「は、何と申しまする」

「飯尾小太郎」

其五十七

流石に天下の三家といはるゝ紀州家、人なき筈はなけれど、小人またく時を得顔に悪木の花咲く全盛、あはれ大泉周左衛門が無念の最後は徒らに血迷うたる犬死の如く傳へられ、本國追放の身を以て人しれず江戸屋敷へ入り込みし曲物との言下に打消されて、その後の是非もなく曲直を分つべき沙汰もなし、されば自己が本家筋の血肉を削り取つて喰ひし同苗甚之丞も、たゞ心あるものゝ風上に置かれざるのみ、類を以て寄合ふ同じ徒輩の目には何の非道も不思議もなく、却て時の出頭人より大義は親を滅する古語の如くに譽められぬ、

稲は稔りて頭を垂れ雜草は伸びて反り返る世の諺、いかな文盲の田夫野人も恥ぢて仕得ざる卑怯の振舞を、大泉甚之丞、その身は満足の面相を備へたる武士の一分として、白日青天の下に結句の手柄顔を振上げつゝ歩むのみか、周左衛門が死後の兩刀こそ一門傳來の名物なりとて、その大の大衆光を時の出頭人に差出し、その小の福岡一文字を自己の腰に帯びて、おもはぬ不意の得物に舌鼓を打ちぬ、

その甚之丞が許へ近來の新參に召抱へし下郎の林平といへるもの、きけば同じ本國の百姓、六年の汗水を貯へて生涯の語り草にと江戸見物の折柄、おもひの外に繁華に氣を取られしのみか、旅の空に生命と頼む胴巻までも抜き取られて、歸るに歸れぬ立往生の身を大川へ投げ

むとせし曉、扶はれしは幸ひ諸家方へ人足の口入家業、その親分の今戸橋庄五郎が手より來りしとの事なれど、實は名倉の勘治平、

もはや江戸にある甲斐なしと、さまざまに引止められし宥觀にも高田左門にも我から身の暇を乞うて、おめく故郷の空へ立歸りし筈の勘治平、そつと人しれず甚之丞が許に忍び入りに名を變へつゝ、下種ながらも顔色に出さず無念の腸を絞る夜晝、おのれやれ、人斬庖丁を振廻す業は知らずとも寸隙さへあらば覺悟の相撲に取つて押へて組み伏せて、六尺總身の力に咽喉筋を絞め殺しくれむとの一念、

かくとは夢にも知らぬ甚之丞、新參ながら同じ本國の百姓といひ、第一は市中の繁華に見惚れて自己が胴巻まで拔取らるゝほどの奴と、その愚直の體に心を許せしのみか、見れば荒仁王の如き大兵肥滿の巨漢、諺にいふ底しらすの白痴力も嘸やと思ひ、草履取に召連れても風俗さへ仕立てなば天晴れの伊達奴、加之も三年目、御歸國の御供さへ叶へば給金も入らぬとの無慾さに、これも案外の拾ひ物、おもはぬ不意の得物と、またもや舌鼓を打ちぬ、勘治平の林平、この體を見濟まして、舌鼓の返報に音なき赤い舌、べろりと出しぬ、うぬ畜類め、どうするか待つて居れ、

其五十八

本國の我居屋敷とは違ひ江戸勤番の長屋住居、八百石の上士ながら三室の外は臺所と十坪に足らぬ圍ひ庭、加之も三年交代の江戸詰に妻子眷族を携へねば、大泉甚之丞、たゞ二人の若黨と下郎一人の男世帯、それに近來めし抱へし林平を加へて、以上こゝに主従四人、わけて今日は勤務非番の氣樂さ、秋なれど十月の小春日和に寒からぬ夕暮、縁端の障子を明け放ちて、晚酌の微醉に何心なく見れば、やうく十坪に足らざる庭の樹間に例の林平、六尺

仍如件

の大兵を縮めながら兩の手に空を掴んで蕩掻くが如き體、

『林平、こりや林平』

はツと答へて振り返るや否、おもはぬ小枝に面を刺されて目鼻を皺めながら、そのまゝの中間に茂れる木葉の間隙より差出せし盤大面、みれば蜘蛛の巣に閉ぢられて猶更ら呵しく、甚之丞からくと高く打笑ひぬ、

『林平、もう捨て置き、わづか三年の勤番住居ぢや、どれほど手を入れても世話甲斐の築山泉水のあるでなし、たゞ家の息ぬきに空けた掃庭ぢや、はゝゝゝ』

『それに致しませ、かう樹木に蜘蛛の巣を張出しましては、第一この下郎め、山里の片田舎で地獄の鬼と掴み合ふほどに高汗を流して働き馴れました五體が、あまり俄の極樂さに却つて氣骨が痛みまする、もし御目障りとあれば今日は此まゝ、また御出勤の時』

『冥加のよい奴、この後は随分、目をかけて取らずで、また行々は御家の足輕か、身の若黨分にも取立てゝやるぞよ』

『や、何と仰せられまする、かやうな土臭い奴が、もし萬一お國元へ御供の節さやうの身分になりますれば、それこそ村中の出世頭、まづ寺の和尚と名主庄屋を退けて、この下郎奴が第一の男と唄はれまする次第』

『はゝゝゝ面白事いふ奴、どうぢや林平、其方が生れた片田舎の瘦村で第一の男と唄はれる前稽古に、この花の大江戸で日本一の大門口を唄はれて通る全盛男があるぞ、其方の身にあやかると、その華奢振を見せて遣はさうか』

『此お江戸で日本一の大門口とは、承るだけでも嘸やと存じまする、どこに御坐りまするやら、かやうな卑しい身で、御奉公冥加、もし御供が叶ひますれば』

仍 如 件

「その大門口は見た上の事ながら、唄はれて通る全盛男は林平、他でもない、この身ぢや、幸ひ今夜は此ほどより我を待兼山の杜鵑、久しぶりの啼音一聲、どりや聴きに行かうぞ、はゝゝゝ林平、そつと供せい」

「はッ」

其五十九

利慾非道の表に抜目なき小人の常も、人しれぬ戀の裏道には内々の大穴ありて遠き本國の妻子を取残せしまゝ三年の江戸勤番に獨寝の身を保つべき筈なく、白晝の人前こそ武士の面目、お錠口を漏れ来る奥女中の白粉氣にさへ鼻持ならぬ面を皺めながら、まツくら闇の夜は魂魄脱殻の五體、そつと門番に袖の下を通はせて屋敷を這ひ出すや否、さす敵の女も女、金ゆる靡く賣色の巷を覗うて脇目も觸らぬ慕地、

わけて大泉甚之丞は何事にも表裏の曲者、晝は人に對うて女林制の鐵兜を振立つれど夜は絲目の切れし戀の奴風、どこまで白痴の風に飛去るやら、ふわくと宙に身を浮かせて心も上の空となりつゝ、其ころ吉原に全盛の遊女、名は松葉屋の藏人といふ身代潰しの名譽、男殺しの本尊が許へ通ひ詰めぬ、加之も萬人一様の色香に自己たゞ一人が微笑を含んで古歌の情に似たる風情、我を待宵の藏人とは此奴、この道ばかりは案外の善人、まして我ための油斷大敵、不意に飛び付いて首を捻ぢ切りむとする勘治平とは知らず、たゞ田舎生育の六尺男を物いふ花の中央へ投込んで野暮の骨頂を弄ばむとの一興、その林平を内々そつと供に召連れながら、當時流行の卷羽織に正平革の腰巾著、面にも似合はぬ伽羅の匂ひを肌著に添へて、自己ばかりが寛活伊達の大盡風、

「林平、さア日本一の大門口に近づいたぞ、こゝが土手節の土手八町、うき世の外の通路ぢ

や、は、は、は、

林平は廣襟に白ぬき子持の横筋を染め出したる黒木綿の素袷、梵天帯に尻からけて腰に木刀一本、片手に糾鼻緒の替草履を掴みながら、甚之丞の影に従うて四邊を見廻せば、ふけゆく世間の夜も此里の夕暮、まして今は宵うち、往來の前後に色俄鬼の亡者ぞろぞろ立續いて、浮世の外の通路と吐したは時に取って面白き其身の前兆なれど、おのれやれと組んで捻ぢり伏せて思ふがまゝの冥途へ蹴込まむ寸隙もなし、

「仰せられまする日本一の大門口、どれで御坐りまする」

「あれ、あの萬燈の餘光、ほつと漏れて火事のやうに闇を破る入口ぢや、その大門を潜れば古今名筆の畫より脱け出した三千の美女、また五町まち三界は目の球を射返さるゝ不夜城、腸に染み渡る色糸の音も聞えるぞ、うろく狼狽へて早腰うち抜かすな、しかと胴骨を押

し据ゑて供せい」

「はッ」

「たゞ見物ばかりの供でないぞ、いつ何時この身の姿どこへ消え失せても慌て、驚いて捜し廻るな、其方には別の座敷で酒も珍味も夜明しの飲み次第、喰ひ次第ぢや、腹の蟲の宿替せぬやう用心せい」

「はッ」

其五十八

紀州の果の片山里に育ちし匹夫ながらも勘治平、この江戸の空に日は淺くとも主従の契約、その知己の恩に報いむとて、名を變へ身を忍んで首尾よく怨敵の手許まで入り込みしが、流石に本國より連れ來りし譜代の若黨二人と下郎一正の守護、加之も甚之丞め、きけは藩中の

仍 如 件

諸士に向うて劔道指南せし事もありとの風聞、うかく飛付いて生涯一度の業を仕損ぜむよりは、あくまで心を許させし後、寸隙を窺ひ時機を覘うて一息に絞め殺さむとの覺悟、をりからの僥倖、天の賜もの、この我を人しれぬ戀の通路に伴うて、内々そつと屋敷の外に酒色の一夜を明さむとは、待ち受けし時節到来、これほどの注文は朝夕の佛神にも念じかねたり、おのれ賣女に魂魄を吸ひ取られて五體の骨節ふらくと海月のやうになつたるところを付視ひ、取つて押へて生面に怨念の青咲を吐いた上、ゆるく捻ぢ殺してくれむとの一心、されど宵の途中は往來の目目に寸隙を得られず、聞き及ぶ大門を潜りて後も、生來こゝに始めて足踏み入れし廓の不知案内、また思ひの外の華奢雑踏、けに不夜城の諺いづこの隅も隈も白晝の如く、わけて大盡風の伊達騒動に猶更の寛活全盛、いよゝゝ人垣に築かれて近寄る事さへ叶はぬのみか、幸ひ其遊興も果て、夜更けし頃は彼奴どこに姿を隠せしやら、我た

だ一人、引手茶屋の一室に取残されて、おめく明行く空を無念の眼に睨みあけぬ、遊里の習慣を知らざる我ながら、さても案外、あまりの空だのみ、この體では今後また幾度こゝに来るとも、何の甲斐なき彼奴が酒色の見物、屋敷のうちより却て事の面倒なりと、勘治平おもはず舌鼓を打つて睨み廻す折しも、いづこよりか忽然と現はれ來りし甚之丞、きぬくの名残惜しげに宿醉の寢惚面、

「や、林平、どうぢや、前夜の我等が全盛、傍で見える目も眩ゆく自然の氣が浮いて面白からう、ようも魂魄を取止めて神妙にして居たぞ、第一あの御敵様を何と見た、ありや此廓で數ある中の、音に聞えた名物、せめての冥加に近う寄つて身が肌を嗅いで見、前夜の移り香、今朝まで斯うぢや、きぬくの別れ際に二の腕を噛まれた齒痕、や、徹へたぞ、徹へたぞ、はゝゝゝゝ」

仍 如 件

吐したりな此奴、その夜迷言きくための我でないぞと思へども、眼前に手足の詮方もなき苦  
笑ひ、

「はや、御歸邸で御坐りまするか」

「歸すは來るを待つとやら言ひ居つた、は、は、は、さて歸る事は歸るが、宵と違つて朝の面目  
が面倒ぢや、林平、供に及ばぬ、ゆるく後より來い」

大門の外に待ち受けし用意の駕に飛び乗つて、これも小判の勢ひで駆け行く眞一文字の影を、  
勘治平あつと呆れて見送りぬ、

其五十九

たとひ大地を打つ槌は外るゝとも、時節到來、この大油斷を規は、彼奴の生命取外すべき筈  
なしと、はや手に攔むが如く思ひし吉原の一夜も思ひの外空頼みに、人しれぬ勘治平が猶

更の無念、この上は夜半の夢の寢首を絞めてくれむと片睡を吞んで待ち受けぬ、

可憐ら酒色の巻に取遣せしより二日目、はや日は暮れて今しも夕飯の膳に對ひし折柄、奥の  
一室より甚之丞の聲、

「林平、林平」

はツと答へて其まゝ、箸を抛け捨てながら、臺所より走せ行きつゝ奥の闕際に伺へば甚之丞、  
眩を枕に轉び寢の顔もて近う這ひ寄せとの體、

「いかう腰の邊へ氣が閉ぢ込んで堪らぬぞ、なれど世間なみくくの盲目按摩では手緩い身  
ぢや、幸ひ林平、其方は力量があらう筈の奴、揉んでくれ」

「は、力量は兎も角、いかやうに揉んで御意に叶ひますやら、第一その業が」

「いや、醫者は病人に教へられる凡例ぢや、そこを揉め、こゝを揉めとの指圖はするぞ」

仍如件



「其お指圖さへ下さりますれば」

「さア採め」

「はッ」

勘治平、すつと摺り寄つて、甚之丞が横に臥したる腰骨の上、そろく両手を掛けながら、わざと腕力を偷んで採み始めぬ、

「この邊で御坐りまするか」

「いや、左、左、その手の左、まだ左の方ちや」

「いかゞで御坐りまするか」

「む、其處ちや、なれど林平、案外に徹へぬぞ、療治に會釋は入らぬ、力量を出せ、ぐつと出せ」

勘治平、採みながら思はず首を差伸ばして、そつと甚之丞の面を覗けば、さも心地よけに眩枕のまゝ目を閉ぢし體、

おのれ、この林平を何物と心得てか、幸ひ兩刀は離れて床の間の刀架、加之も其小刀は見る毎に朝夕の我腸を斷つ故主の記念、まして五體を横たへながら我手に任せしのみか、わざわざ力量を出せと吐すは自滅の運命、此まゝ組付いて咽喉笛を捻ぢ切らむと思ひしが、まだ宵のうちの兩隣屋、一室の彼方に二人の若黨奴が夕飯の折柄、

されど一度ならず二度までも現在の我手に入りし此奴、みすく無事に生き漏らすも心外の至極、せめて後日のため今こゝに總身の力業、腰骨を碎くほどの荒療治してくれむと、勘治平、餘所ながらの空笑ひ、

「これで少しは、御意に叶ひまするか」

仍 如 件

「なるほど、力量はある、なれど林平、六尺肥満の割合に足らぬぞ」

「いや、實は手加減を致して居ります事、もし出る力を出しますれば、恐れながら」

「何といふ、出るだけの力を出せば骨でも損ねるとか、は、ムムム他は知らず、この大泉甚之

丞、幼少より武道一流で、鐵の如く取固めた五體ぢや、黽黽で修行の百姓力量では林平、

はムムムム兎も角も出るだけ出して見い」

其六十

名を變へ姿を秘して多年いづこの里に忍び居るやら、雲を掴むが如き怨敵さへ千辛萬苦の曉を捜し出して天晴れ本望を遂ぐるものあり、ざるを今こゝに現在その怨敵の懐中へ入込みて朝夕たえず近づくのみか、腰を揉めとて横たへしまゝの五體を我手に任されながら、加之も六尺大兵の割合には力の足らぬ奴といはれし勘治平、

なれど襖を隔て、譜代の若黨一人が夕飯の折柄、まだ宵の兩隣屋より朋輩うち寄りて小謠の漏れ来る折柄、まして本人の甚之丞めは藩中の諸士へ武道の指南せし事ありとの奴、我は口これ業も術も知らざる片田舎の百姓力量、

甚之丞いよく笑ひながらの肱枕、

「林平、それが出るだけの力量か」

「いや、まだ實は、聊か手加減を致して居ります事」

「何、まだ手加減をして居るとな此奴はムムム、もはや揉療治に及ばぬ、たゞ力量だけ出して見い」

「お氣に觸りませうかは存じませぬが、下郎め、國元の田舎に居ります節、かやうな一時の座興から、おもはず人間一人を不具に致しまして」

仍 如 件

「こりや林平、それは其方等が分相應の逸興から出来た過失、高が百姓同士の事ぢや、は、其方よりは身材で三四寸、體量で四五貫も不足ながら、武道鍛錬の腰骨を備へた甚之丞、は、まづ不具にする氣で擱んで見い、もし萬が一、堪へ兼ねて思はず聲でも出せば小判一枚くれるぞよ」

「は、なれど、あまり勿體ない事、現在の御主人へ眼前、お怪我をさせました上、御褒美まで戴きましたは」

「や、ほざいたぞ此奴め、は、もう不具にでもする氣ぢやな、おもしろい、さア主と思はず、うらみの敵と思つて總身にあるだけの力瘤、出して見い、うけて見るぞ」

「いはずとも吐さずとも固より覺悟の我、さるを現在おのれの口より主と思はず怨恨の敵と思つて總身の力を出せとは、よくく念の入つたる奴、もはや襖を隔てし二人の若黨も小論の

漏れ来る兩隣屋も何のその、此奴の腰骨まで擱み砕いて起てぬところを僥倖、捻ぢ伏せて絞め殺しくれむとの一念、勘治平そろく腕の袖を巻上ぐれば、横に臥しながら斯くと見し甚之丞  
「は、まづいよく小判一枚がほしくなり居つたな」

「御褒美は兎も角、お慰みのため」

甚之丞、横に臥したる五體を其まゝ疊に伏し直して張り出せし左右の兩腕に面を埋めながら、腰骨に滿身の力を込めて兩脚すつと差伸ばしぬ、

「林平、さア來い」

いふにや及ぶ勘治平、梟の如き目を剥出しながら、わざと燈火と背に薄闇き腕力、六尺の腕骨より絞り出して雙の肩口より手首に傳へつゝ、そつと四邊を見廻しぬ、

「御免を蒙つて、林平め、只今、まゐりまするぞつ」

仍 如 件

其六十一

他の目よりは小人にもせよ悪人にもせよ、我ためには譜代の恩顧、その大切の主が襖を隔てて伏したるまゝ、五體を敵の兩手に委しながら、今ぞ生死の間一髪とも知らねば二人の若黨一個の膳に差向うて夕飯の箸もろとも聲を潜めての物語、

『あの林平め、我等の手前も憚らず、頻りと近來お氣に入る體ぢやぞ』

『どれほど一時の御意に叶うても、高が水呑百姓の當座下郎、只お國元に生れたといふだけ幸ひ江戸に野倒死の生命を拾ひあけられ、あの總身に智慧の廻り兼ねた六尺の大白痴が座興になる分の事ぢや、その外に何の取得のある奴か』

『いや、何の取得は無うても案外に運のある奴、内々そつと極樂の御伴までしたらしいぞ』

『そこが玩弄物に出來た奴、とるに足らねばこそ自然、お氣も許さるゝ筈ぢやはゝゝゝ』

『なれど彼奴、何となう我等を餘所にして、じたい蟲の好かぬ奴』

『好かずとも、まづ捨て置き、もし堪忍のならぬ時は叩き出すに面倒のない奴、今いふ高が百姓の扱はれもの』

互に夕飯の箸とりながら、膳に向うて私語く折も、襖を隔て、耳を貫く一聲の悲鳴、ぎやつと叫ぶや否、忽ち組付き躍返る俄の物音、

二人の若黨、はつと思はず箸を抛け捨て、起たむとする一刹那、襖を蹴放つて宙を飛び來る勘治平の五體、膳も茶碗も飯櫃も打碎いて眞ッ逆倒に落ち込みながら、

『しめたぞ小判一枚ッ』

みれば甚之丞、かくまでとは思ひの外に腰骨を掴まれて、我を忘るゝ悲鳴もろとも流石の武道手練の林平を取つて抛けは抛けたれど、其身も俄に起ち得ぬ體、満面を皺めて苦し